

感染症危機を迎えた社会において新たな処方箋  
～One health(一つの健康)から One release(すべての生命の解放)へ～

中村安里

目次

<b>1章</b>	<b>はじめに</b> .....	<b>2</b>
1-1	研究手法 .....	3
1-2	筆者の背景と問題意識 .....	4
<b>2章</b>	<b>先行研究</b> .....	<b>7</b>
2-1	One health (ワン・ヘルス) とは? .....	7
2-2	家畜化の現状と問題点 .....	11
2-2-1	工場式畜産に関して .....	11
2-2-3	工場式畜産の人や生態系への影響に関して.....	13
2-2-4	家畜化の発生と感染症との関係性、文明論的観点から .....	16
2-3	解決策としての考え方と実践 .....	18
2-3-1	動物福祉(Animal welfare) .....	18
2-3-2	家畜倫理～倫理学から学ぶ～.....	20
2-3-3	具体的実践～身近な経験から学ぶ～.....	21
2-3-4	いじめと癒しの構図から学ぶ、人と自然のいのちのつながり～心理構造から学ぶ～ .....	23
<b>3章</b>	<b>本論文の問い-なぜ人と人の中で、あるいは人と自然界の間での抑圧構造の連鎖が続いているのか?-</b> .....	<b>28</b>
3-1	支配被支配構造の発生と解放に向けたアイデア .....	28
3-1-1	支配被支配の関係はどのようにして生じるのか?～歴史から学ぶ～ .....	28
3-1-2	パトリアルキー (家父長制)による問題.....	35
3-1-3	One release(全ての生き物の解放) .....	41
<b>4章</b>	<b>結論</b> .....	<b>43</b>
	<b>参考文献</b> .....	<b>45</b>

# 1章 はじめに

今日、新型コロナウイルス感染症(COVID-19)のパンデミック(世界的拡大)が出現し、世界規模での感染症危機えると同時に経済的不安定を招き、人々の不安や恐怖の高まりと同時に、社会的孤立・孤独を加速化させ、さらに近年のフェイクニュースに見られるような社会的分断を招いている。このように感染症危機はあらゆるレベルまで浸透し、社会の根本を覆そうとしている。

しかし、地球規模の課題はコロナウイルス感染症にとどまらず、人口の増加、新規感染症、生物多様性とその保全、地球温暖化、森林の減少、有機廃棄物、海洋汚染、オゾン層の破壊、開発途上国の公害、酸性雨、土壌の劣化、バイオテクノロジーに由来する危険性、環境悪化を進めるエネルギー生産、人間の無知と変化への恐怖、南北の対立、軍事的不安定と民主主義の欠如、都市環境、労働環境、資源の消失など多岐にわたる問題が地球の各地で発生している。そして実はこれらの問題はそれぞれ密接に結びついていて、一つ悪化するとまた一つ悪化し、ドミノ倒しの様に事態が連鎖する事がわかってきている。なぜなら、今日の生態学あるいは地球システム科学が明らかにしているように、自然環境を相互に作用し合うシステムとしてとらえることで、生態系における生物同士が複雑な関係性を構築しており、相互の関係に依存しながら一つの生態システム並びに地球システムを維持しているからである。また、人間の社会は生態系から恩恵を受けて発展し維持されてきたため、地球環境の破壊並びに生態系の破綻によって、人間の社会も破綻を迎えようとしている。そして、この根源的な問題を作り上げたのは、他ならぬ人類自身なのである。

地球システムや生態系は地質学的サイクル、生物地球化学的サイクルなど、物質の循環によって成り立っている。人類は長い歴史の中でこのサイクルに人為的介入をし、長期的に人間と自然の間で支配被支配構造を作ってきた。その結果生態系はバランスを崩し、今日の「人類にとっての」地球環境問題を引き起こしていると考えられる。なお、人類にとっての、と前置きをしたのは、必ずしも今日の地球環境問題が自然界にとっての問題とは限らないからである。自然界は常に、何かしらの形でバランスをとろうとしている。

とはいえ、その自然現象の一部は、ときに人類にとって大きな被害をもたらすものであるかもしれない。そしてその種を人類自身が撒いてきたとしたら…。私たちは、局所的な問題解決の視点と、それに基づく自然界への介入によって、これ以上の破壊者にならないためにも、今日の問題の背景を歴史から学んでいかなければならないだろう。

地球課題は複雑に関係しあっていると述べたが、実は、近年感染症対策が見直されており、感染症に対して急性期の医療処置や、ワクチン接種のような表層化の問題解決だけでは、今の感染症の背後にある複雑に絡み合った問題には対処できない事がわかってきた。そして近年、ヒトだけではなく、動物、環境の健康どの健康も欠かすことができないという認識のもとに、これら3者の健康や健全性を維持していこうという考え方であるワンヘルス(one

health)の考え方が見直されている。

この論文では、ワンヘルスの考え方を紹介すると同時に感染症が生じてきた生態学的あるいは文明的背景を解きほぐしながら、動物福祉と家畜倫理について政策的にあるいは心理学の手法を用いて実存的に検討していく。そしてそこからさらに議論を進め、そもそもなぜ人間と自然の間であるいは人間の間で支配被支配構造が出来上がったのか。について歴史的な背景と同時に、パトリアルキー（家父長制の広義な意味）という実存的背景を述べながら支配被支配構造の人間間でのあるいは人間と自然の間での構造連関について理解を深め、One release(すべての生きものの解放)という新しい概念を提示し、それはどのようなものか説明していく。そして最後には男性原理(男女の区分は暫定的にしている)と言われていた考え方の新たな視座を捉えようとしている。

### 1-1 研究手法

ではなぜこのような非常に入り込んだプロセスをとるかということ、近年地球市民教育のあり方が見直されており、地球市民教育では、「空間」的な、そして「時間」的な認識を、現代の具体的な「諸問題」と結びつけながら学び、その中核に、自己の「内面性」をおくようになってきたからである。デイビット・セルビーは、図0のように「グローバル教育の4つの次元」を提案している。そして、セルビーは「システム論的ホリスティック・パラダイム」を提示するが、これは、自己の内面性とかかわりを見据えているところが全連関的なホリスティック(holistic>holos>whole「全体性」、heal「癒し」、holy「聖なる」、holon「ホロン」)な方向性に特徴的なように、諸問題の歴史性、そして生態系や地球における広がりをつえ、さらにはそれらの諸問題の背景にある課題を内面性と接続させながら考察する事が、近年の複雑に絡み合った地球課題を解決する上で非常に重要だと考えたからである<sup>1</sup>。

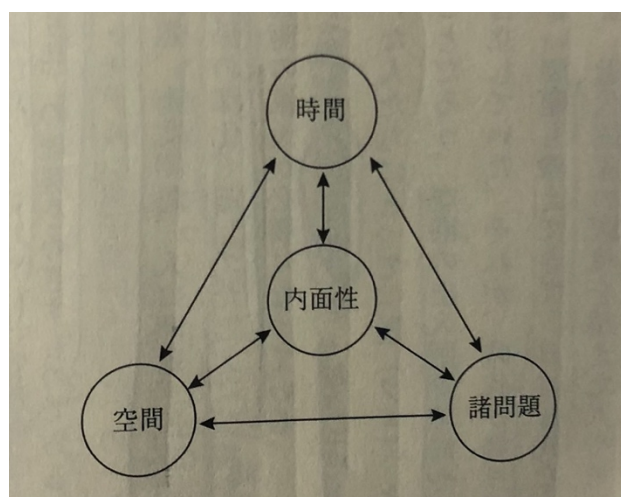


図0<sup>2</sup>

<sup>1</sup> 吉田 [1999] pp.94-95

<sup>2</sup> 同上 p.94

## 1-2 筆者の背景と問題意識

私自身実は医学部を卒業しているが、今日の病院では多忙な仕事と感染症拡大により人と頻繁に会う事が制限されているなどストレス環境が続いており、混沌とする医療現場において医療者が度々バーンアウトする事が報告されている。

このような病院の危機的な状況を踏まえても、問題を局所的に解決しようとする事によって更なる問題の悪化を招くことは避けたい。よって大局的なあるいは歴史的空間的内在的広がりのある議論をすることは医療危機に直面した社会にとっても、今後必要となってくる議論だと考える。

今から述べることは、私的な事柄で恐縮だが、本論文の独自性にも関わる事なので、お許しいただきたい。実際に筆者は、学生時代 20 を超えるボランティア活動に励む中で、重度心身症の子供達、あるいは様々な障害を持った子供たちの施設、福島県の子供たちの受け入れ、被災地における様々なボランティアや国際的な活動など様々な活動をしてきたが、低賃金で逼迫した福祉環境で適切なケアを受けられず自傷行為をしてしまう人、原発被害による福島県内部での分断と風評被害、国連の現場における議論の制限と権力争い、あるいは身近な友人の自殺など様々な事象に直面する中で、あるいは地球の裏側で生じている飢餓の問題、あるいは児童の虐待、売買、あるいは少年兵などの国際的な問題にも直面する中で、様々な問題に過度に入り込み、私が所属していた組織の環境要因も重なり、自分自身の中にその苦しみを限りなく受け入れてしまった経験がある。

そして物事は複雑に絡み合っているため、問題を分析し始めると連鎖的に問題はどこまでも続くような気がする一方で、医学部は単科大学で非常に限られた専門分野によって成り立っているため、私の中で様々なトラウマと関連して思考の絶望的なループがまわり、ついにはバーンアウトしてしまった経験がある。私がやり過ぎたと言えそうである。理由はわからないが、当時話を聞いてくれる人もいなければ適切なコミュニティーも身近になく孤立していたため、バーンアウトに至ってしまったのだと思う。

上記の経験から学んだこととして、問題を同じ視座から考えても思考のループを招き問題が問題を生み出してしまうということだ。アインシュタインも「いかなる問題も、それを作り出した同じ意識によって解決できない」と述べているが、複雑な問題に向き合うときには見ている視座を変容する必要性を学んだ。

また、医学部で習う医学は病気を診断し、そして問題を取り除いていくような問題解決型思考だが、この医学モデルだけでは、病の背後にある複雑な問題に対応するときに、あるいはいのちある個人に向き合う際に不十分だということを学んだ。

医学部では、人の物理的な命を救えることあるいは病気を克服できることを善、病気が解決できないことあるいは救えないことをある種の敗北と考えているので(自分の思考は特にそのような形に偏っていたと考えられる) 救うことができる自分が正義であり、救うことができない自分は悪であるという二元論的考え方に陥り、病と同化すると同時に自分を裁いてしまうような思考が働いてしまった経験から、善悪やあるいは勝利敗北のような二元

論的な考え方の代わりに、それぞれの痛みやその背後にあるいのちのニーズを聴いていく必要性を学んだ。

このように、複雑な問題に向き合うときには見ている視座を変容する必要性、医学モデルだけでは、病の背後にある複雑な問題に対応するときに、あるいはいのちある個人に向き合う際に不十分あるということ、善悪やあるいは勝利敗北のような二元論的な考え方の代わりに、それぞれの痛みやその背後にあるいのちのニーズを聴いていく必要性を医学部のある種の失敗経験を通じて学んだのである。そしてこの学びは本論文で生かされたものとなっている。

また、私自身最終的に破綻した後は、筋痛性脳脊髄炎という病に罹患のだが、実はこの病はコロナ感染症後遺症として最近非常に注目されている病でもある。筋痛性脳脊髄炎とはどのようなものかについて以下に述べる。

筋痛性脳脊髄炎は、労作後遷延する消耗感によって特徴づけられ、長期にわたって継続または反復し、休養によっても十分回復しない極度の慢性疲労のほか、多彩な症状を伴い、日常活動や労働能力を顕著に低下させる。経済的損失も大きく社会的にもきわめて重要な健康問題であるにもかかわらず、病因、危険因子、病態生理が不明であり、有効な診断・治療および予防戦略は、いまだ確立していない。若年者、とくに女性に多く発症し、発症率は0.4~1.0%、患者の約4分の1は重症で寝たきりに近い生活を余儀なくされている<sup>3</sup>。

本症が直接の死因となることはないが、ADL、QOLには多大な悪影響を及ぼす。患者の約4分の1は寝たきりに近い生活を余儀なくされる。ただ、必ずしも生涯にわたって進行性というわけではなく、約70%の症例では若干症状が改善した部分寛解期を迎えるようである。病歴が長期になると症状の改善はかなり困難であるが、短期例では急速に改善することもある<sup>4</sup>。

「患者の約4分の1は重症で寝たきりに近い生活を余儀なくされている」という記述からわかるように、この病は全身の痛みと倦怠感と思考や日常生活において様々な能力の低下を招く地獄のような病だが、実際に治癒する人は稀である病気でもある。私はこの病に5年以上向き合う中で、自分の身体、精神、さらには自然界そしてその背後にある深層の世界とも呼べるような世界とのつながりを取り戻し、生き方レベルでの変容を迎える中で徐々に回復を迎えているのである。

このようにコロナ後遺症でもある疾患を先に経験することによって、人々が抱えている不安や痛みあるいは問題をある種先取りして経験したと考えている。実のところ、私はど

---

<sup>3</sup> 三羽 [2017] pp.345-346

<sup>4</sup> 同上 p.350

こか今現代社会で起きている課題を自分の中でもうすでに十分味わい尽くしてしまったような気がする人が多いのである。私的な事柄にわたって恐縮だが、この論文の背後にある筆者の想いを汲み取っていただければ幸いである。

さて、それでは、先に論文の背景でも述べたとおり、One health(ワンヘルス)についてまずは検討していきたい。

## 2章 先行研究

### 2-1 One health (ワン・ヘルス) とは？

今日、大規模な感染症パンデミックを迎える中で、様々な問題をワクチンのような対処療法だけで対応するのではなく、そもそもの感染症が生じてきた経緯を考えながら、根本的に問題解決していこうという兆しが見られる。その一つの取り組みとして、人と動物と環境の健康をトータルに考え、人、動物、自然環境全体の健康を目指すワンヘルスという考え方が改めて見直されるようになってきた。

本節では、One health という概念の説明をしながら、この概念が生じてきた具体的背景、そして今日の感染症を取り巻く課題と福岡県における One health に関する取り組みを述べながら、様々な角度から考察していきたい。

日本ワンヘルス学会によれば、ワンヘルスの認識について以下のことを述べている。

グローバル化が進む中で、ヒトの健康を保つためには、ヒトだけではなく、動物、環境の健康も維持して行く必要があり、どの健康も欠かすことができないという認識のもとに、これら3者の健康や健全性を維持していくための概念を One Health といい、その活動を One Health Initiative という。すなわち、ヒトだけの健康を追求するのではなく、私たち人間社会においても動物や環境の健康をトータルにとらえ、考えていかなければならない時代が来ていると考える。そのため、ヒト、動物、環境の健康は共通しており (one health)、環境保全、生物多様性を含めヒト、動物、環境は深くつながっている (one world) と認識する<sup>5</sup>。

また米国疾病予防管理センター(CDC)によれば、ワン・ヘルスとは、人、動物、植物、そしてそれらが共有する環境の相互関係を認識し、最適な健康状態を達成することを目的とした、地域、地域、国、そして世界レベルでの協力的、多部門的、学際的なアプローチである<sup>6</sup>と述べている。

これらの定義から、ワンヘルスという概念の価値は、健康の概念の動物や環境への拡張させることで、20世紀における専門の細分化、さらにそれぞれの分野の交流が乏しい縦割りの考え方にかわり、分野横断的に協力しあい、複雑な事象の一面だけでなく全体像との関係性を捉える中で今日の問題に対応しようとしているその変化にあるといえる。ワンヘルスが対象にしようとしているのは、人間、動物、自然環境の健康の問題であり、今日問題となっている感染症を超えて議論されていることも重要な点である。

この理念は、平成5年(1993年)に開催された世界獣医師会世界大会で採択された「人と

---

<sup>5</sup> 日本ワンヘルスサイエンス学会「学会趣意書」

<sup>6</sup> Centers for Disease Control and prevention「One health basics」

動物の共通感染症の防疫推進や人と動物の絆を確立するとともに平和な社会発展と環境保全に努める」という「ベルリン宣言」が端緒とされている。そして、平成 16 年（2004 年）、アメリカ・ニューヨークのロックフェラー大学で開催された「ワンワールド・ワンヘルス」をテーマとするシンポジウムに集結した世界保健機関（WHO）や国際獣疫事務局（OIE）、国際連合食糧農業機関（FAO）など世界中の専門家が感染症リスクの抑制を図る戦略的枠組みとして提示した 12 の行動計画（マンハッタン原則）を経て、平成 24 年（2012 年）に世界獣医師会と世界医師会が「ワンヘルス推進の覚書」を調印したことで、ワンヘルスの取組は、医学と獣医学の垣根を超えて世界に広まることになった<sup>7</sup>。

日本でも、公益社団法人日本医師会と公益社団法人日本獣医師会が連携し、ワンヘルスの理念の実践に向けた取組を進めてきたが、平成 28 年（2016 年）11 月に福岡県の北九州市で、世界 31 カ国から 600 名を超える医師、獣医師等が参加し、「第 2 回世界獣医師会-世界医師会”One Health”に関する国際会議」が開催された<sup>8</sup>。

このような過程の中で、ワンヘルスという概念は世界的に広まっていったが、今日の COVID-19 の感染症拡大に伴い、ワンヘルスという考え方とその実践は、世界的にますます注目されるようになってきている。

今回の COVID-19 やよく知られた狂犬病をはじめ、近年、国内外で大きな社会問題となった、新型インフルエンザ、牛海綿状脳症（BSE）、鳥インフルエンザ、エボラ出血熱、そして同じコロナウイルスによる中東呼吸器症候群（MERS）及び重症急性呼吸器症候群（SARS）といった感染症は、動物に由来し、人への感染力を獲得した「人と動物の共通感染症」であり、WHO（世界保健機関）で確認されているものだけでも 200 種類以上ある。また、農耕や都市の拡大のために森林開拓、野生動物の取引等の人間の活動によって環境や生態系の破壊が進み、人と動物との適切な距離が保てなくなったため、野生動物保有の病原体が、直接、蚤、蚊などを介して人や家畜、家庭飼育動物等に感染するようになったものと考えられている<sup>9</sup>。

また、薬剤耐性菌の問題も深刻であり、抗菌薬は、家畜などの動物にも使用されており、畜産現場でも「薬剤耐性菌」が発生し、環境への汚染や、畜産物や農産物を介して人へ拡がることも問題となっている。世界保健機関（WHO）は 2015 年に薬剤耐性菌対策に取り組む決議（グローバル・アクション・プラン）を定め、加盟国に対し、各国の薬剤耐性菌対策を進めることを要請した。日本でも 2016 年に薬剤耐性対策アクションプランを定め、その取組を進めている<sup>10</sup>。

ここで問題になっているのは、人口と資本主義の伴う経済規模の拡大により、一次産業に

---

<sup>7</sup> 福岡県「ワンヘルス“One Health～人と動物の健康はひとつ。そして、それは地球の願い～」

<sup>8</sup> 同上

<sup>9</sup> 同上

<sup>10</sup> 同上



においても画一的で大規模な産業形態をとるようになったことで生じた数々の状況が連鎖的に事態を悪化させているということである。

例えば、以下のようなことが考えられるだろう。紙や燃料用木材として利用するための過剰な伐採、大規模な農地の開発による森林破壊、パーム油の原料となるアブラヤシの栽培のための大規模な熱帯林の破壊、地球温暖化による森林火災の増加、さらには単一樹木の林業による森林の多様性の低下など、様々な形で森林破壊が生じ、その結果、野生動物の住処がなくなり、普段接触しないはずの、野生動物と人間や家畜との距離が縮まり、病原体を持つ野生動物と接触するリスクが高まる。また、蚊、ノミ、ダニ、ネズミなどの媒介者を介して野生動物から家畜に感染する。さらには、集約された畜産形態である工場畜産によって病原体が変異を繰り返し、致死的な感染症を引き起こすリスクが高まる。あるいは、畜産の現場で抗菌薬が乱用されることにより、多剤耐性菌発生リスクも高まる。そして、感染した家畜やあるいは密猟された野生動物が市場で出回ることによって更なる感染リスクの拡大を招く。最終的にグローバル化に伴う大規模な人の移動により、世界中に感染症が拡大していく。このように、まさにドミノ倒しのような問題の拡大である。

以下は、世界銀行によって作られたワンヘルスのオペレーションフレームワークの冊子で用いられている感染症拡大の状況を可視化した図である。(図1)

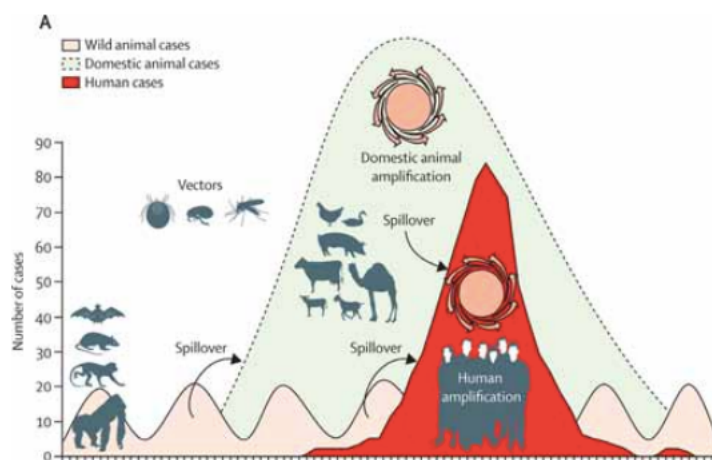


図1<sup>11</sup>

One health に関連する具体的取り組みの指針として、例えば福岡県では①人畜共通感染症対策獣医療をはじめ各分野と連携し、発生予防、まん延予防を図ること、②薬剤耐性菌対策によって、人と家畜の薬剤の適性使用を推進すること、③環境保護によって森林の生態系を守り、生物の棲み分けの維持を図ること、④人と動物の共生社会づくりによって動物愛護の推進と、野生動物の理解と共存を図ること、⑤健康づくりによって、人や動物が、身体的、精神的、社会的に満たされた状態で、過ごすことができるよう生活環境を整え、調和のとれ

<sup>11</sup> World bank [2018] p.6

た自然環境と多様な動植物との関係の中で、主体的に健康を維持していくこと、⑥健康と人と動物のより良い関係づくりによって、化学物質等に汚染されていない水や土（農地）等、健全な自然環境における安全な農林水産物の生産を推進し、人の健康に有益な働きをする微生物の活用を検討し、また「地産地消」及び「食育」を推進していくこと<sup>12</sup>、など6つの軸をあげている。

このように自治体レベルで、条例を作り、市民を巻き込んだ形で人、動物、自然環境の保全と維持、さらには健康の促進を促すための取り組みを、市民を巻き込む形で今後も進めていくことが大きな課題となっている。

一方で、イマニュエル・ウォーラーステインが世界システム論で展開するように、今日のグローバル社会は、先進国、開発途上国、後発開発途上国（あるいは、中心、半周辺、周辺）という区分のもと、先進国の経済成長を中心として、世界の富を集約していく一極集中、ピラミッド型の構造をとっている。そのプロセスの中で一次産業、二次産業、三次産業が分業化され、その過程の中で、自然資本に依存する一次産業の現場では、原材料を安価に大量生産し、先進国に輸出するという構図がとられている。そのため、彼らの意図に関わらず、構造的に自然環境が破壊され、その結果、感染症が発生し、さらには彼ら自身の食生活が崩れ健康が破壊されるという悪循環の構図が今日の世界では起きている。このような社会状況の中で、経済成長が終わりを迎え、定常化社会においてポスト資本主義の社会が構築されていくような動きもある一方、情報技術の発展により更なる一極集中的な経済成長を促進させようとする動きも見られている。

このような国際状況を踏まえると、ワンヘルスの根本的解決のためには、自治体レベルだけではなく、世界経済の構造を見直していかなければ、その実現は困難であろう。

さて、ワンヘルスの具体的実現に向けて地域、国家、世界レベルでの課題はたくさんあるが、今回は人間と家畜の関係性に注目し、畜産を取り巻く現状について批判的吟味を重ねる中で問いを広げていく。なぜなら図1でもわかるように、家畜を介して感染症は大幅な拡大を広げ、その拡大規模は人間を上回っていることから、家畜の問題に取り組むことは今日の社会情勢を踏まえても非常に意義のあることだと考えられるからである。

例えば、ユヴァル・ノア・ハラリは『ホモデウス テクノロジーとサピエンスの未来(上)』の中で「世界の大型動物（体重が数キログラムを超えるもの）の9割以上が、人間か家畜だ<sup>13</sup>」と述べる。彼によれば、世界の大型動物の合計体重のうち11分の3が人間、11分の7が家畜、そして残りの11分の1が野生の大型動物であるという。つまり、世界の大型動物の過半数を家畜が占めていることになるのだ<sup>14</sup>。

家畜を介する感染症の規模が人間の規模を凌駕していることも納得ができる。このこと

---

<sup>12</sup> 福岡県「ワンヘルス“One Health～人と動物の健康はひとつ。そして、それは地球の願い～」

<sup>13</sup> ユヴァル・ノア・ハラリ [2018] p.94

<sup>14</sup> 同上

からも、人間と家畜の関係性から話を展開していくことは重要なことだと考える。

## 2-2 家畜化の現状と問題点

### 2-2-1 工場式畜産に関して

さてここからは工場式畜産の現状と、動物福祉の視点について詳しく検討していく。なぜなら、今日の畜産の多くは工場式畜産という形態をとっており、人間と家畜との関係性を考える際に必ず考慮しなければいけない項目だからである。

現代の畜産は「工場式畜産」と呼ばれるが、他には「工場的畜産」や「動物工場」という呼称もあり、これらはいずれも否定的、批判的な表現である。逆に、この畜産を推進する側の立場からは、肯定的に「集約的畜産」とも呼ばれている。「集約的」とは、生産性が高いとか効率的とかいう意味で、簡単にいうと、最大の利益を上げるということである。この場合の利益とは、生産業者にとっての利益のことである。こうした畜産は、20世紀前半にアメリカの養鶏業で始まり、次第に養豚業、そして養牛業へと広がった。日本では工場式畜産は戦後に始まり、1960年代、1970年代に積極的に推進され、1990年前後に完成した<sup>15</sup>。

工場という言葉からも連想されるように、動物は人間の食事として殺されるだけでなく、大量生産、大量消費のシステムの中で一番コストが抑えられる形で、食という目的に特化し、まるで物以下の存在として扱われている現状がある。一方、その結果として消費者は安価な価格で動物性の食品を購入し、消費することができている状況がある。

以下、人間の感染症の問題を掘り下げる前に、多少長くなるが、動物自身の身に起きている人間によってなされてきた事実をしっかりと認識する作業を行う。というのも、今日の世界で起きていることを、我々の生活から乖離した何処か遠くの場所で起きている事柄としてではなく、むしろ、我々の日常生活の中に潜んでいる事実として認識し、各々の問題として受け止めて欲しいと考えているからである。

例えば、豚に焦点を絞ると、今日の日本には、759万4000頭の肥育豚がいる。豚の肥育は群飼が一般的で、断尾や歯切りが行われる。断尾とは、尻尾を切ってしまうことであり、歯切りとは、犬歯をニッパーで切り取ることである。断尾も歯切りも、豚が他の豚の尻尾やそのほかの部位を傷つけるのを避けるために生後まもなく行われる。これらの切除は麻酔もないままされることが多い。断尾は農家の約82%が行い、歯切りは約64%が行っている。雄の場合には、去勢も行われる。これは、肉質を柔らかくするためと牛を大人しくさせてさせるために行われる。去勢は農家の約95%が行なっている。断尾も歯切りも去勢も、麻酔なしで行われている。肥育豚は、6ヶ月齢で出荷され殺される。ところが豚の寿命は本来10～15年であると言われている<sup>16</sup>。

---

<sup>15</sup> 浅野 [2021] pp.38-39

<sup>16</sup> 浅野 [2021] p.44、枝廣 [2018] pp.17-18

繁殖豚の状況を述べると、日本には約 85 万 3000 頭の繁殖豚がおり、繁殖豚は生まれて 8 ヶ月ほどで妊娠し、妊娠期間は約 114 日である。妊娠豚はストールで飼育され、分娩予定の 7～10 日前に、分娩ストールに移される。ストールとは、豚が向きを変えることもできないほど狭い檻のことである。具体的には、幅 65 センチ前後、奥行き 2 メートルの大きさである。それに対し、経産豚は体長が 1.7 メートル前後、後幅が 42 センチ前後ある。この豚の大きさを考えれば、ストールがいかに狭いかわかる。妊娠ストールは、母豚の管理（受胎・流産の確認・給餌制限、糞尿処理など）が容易であるという、人間にとっての利便性と効率性から使用されているが、母豚にとっては、方向転換どころか首も左右に 45 度程度しか向けられず、食事もトイレも就寝も同じ場所で、ひたすら立っているか座っているかしかない最悪な環境である。ほとんどの時間ただ立っているだけの窮屈・退屈極まりない環境で飼育されると、自分の前の柵を恒常的にくわえてかじる「柵かじり」、口の中にエサが入っていないのに咀嚼し続ける「偽咀嚼」、水を必要以上に飲み続ける「多飲行動」といった異常行動が現われる。最近の知見から、妊娠ストールを使わなくても生産性は落ちないことがわかってきているのにもかかわらず、この状況は続いている。繁殖豚はこのストールの中で生涯のほとんどを過ごし、分娩後、母豚は 3 週～1 ヶ月間ほど子豚に授乳し、離乳後発情したら再び妊娠させられる。こうして繁殖豚は分娩を 5～6 ヶ月間隔で繰り返し、6 産後、3 年 8 ヶ月ほどで殺されて肉になる<sup>1819</sup>。

牛や鶏の状況も上記と類似した状況である。肉牛の場合は、狭い飼育環境の中に閉じ込められ、約 60%の農家が、角を取り除く除角を行い、除角を行なっている農家の 80%が麻酔を使わずに行なっている。また約 87%の農家が去勢を行なっている<sup>20</sup>。

乳牛の場合は、生後 13～15 ヶ月で強制的に妊娠させられ、分娩後 5 日ほどで子牛は母牛から引き離され、10 ヶ月の間、搾乳される。乳用牛は妊娠、分娩、搾乳のサイクルを 3-4 回繰り返し、泌乳量が落ちてきたところで、直ちに殺され肉となる<sup>21</sup>。

肉用鶏は平飼いされ、一羽あたりの面積は A4 サイズの紙一枚ほどの大きさになるほど過密飼育されている。自然界で鶏が成鳥になるまでの時間は 4-5 ヶ月にも関わらず、わずか 7-8 週間で十分に大きくなって出荷される。なぜこれほど短期間で成長するかというと、これは品種改良とエサのためである。ブロイラーのエサは輸入に頼る「濃厚飼料」だ。タンパク質含有量が高く、短時間での成長を可能にする。また、EU では鶏舎に対して「6 時間以上暗い時間をつくること」が義務づけられているが、日本には鶏舎の照明時間についての規則はない。「明るい時間が長ければエサをたくさん食べる」と考えられており、24 時間電気を

---

<sup>18</sup> 同上 pp.44-45

<sup>19</sup> 同上 p.17

<sup>20</sup> 浅野 [2021] p.42

<sup>21</sup> 同上 p.43

つけっぱなしのブロイラー用鶏舎も多い<sup>2223</sup>。

採卵鶏はバタリーケージで飼育され、B5 サイズほどの非常に狭いケージで飼育され、麻酔なしで嘴を切り落とす断嘴が行われる。このような行為は、約 84%の農家で行われている。また採卵鶏の産卵率や卵質が低下したとき、10-14 日断食させて鶏を強制的に換羽し、産卵率や卵質を改善させる強制換羽が行われ、1 歳半か 2 歳ほどで殺される。もっと惨めなのは、採卵用の鶏の雄である。この雄たちは、コストをかけて育てたとしても、卵はうまいし、食用にも適さない。人間の側からすると使い道のない雄のひよこたちは、産業廃棄物として処分されるのだ。孵卵場では、卵からひながかえると、まず雌雄の選別が行われ、雄のひなは塩化ビニール製の箱の中に放り込まれ、積み重なれ、押し潰されていく<sup>24</sup>。

長くなったが、スーパーで動物性の食品を買ったことのある消費者は最低限この現状を知っておく必要があると考える。もし自分が同じ立場だったらと考えるだけでゾッとする現状である。行動の自由はなく、自分自身とほぼ同じサイズの場所に監禁され、場合によっては拘束され、檻に入れられ、痛みを伴う虐待を受けて、拷問のように食べさせられて、太らされる。病気になっても看病されることもなく、友人も恋人もいないまま強制的に何度も妊娠させられ、最終的には、殺されて食べられるのである。また、賞味期限が切れて品質が悪化すれば、食べられることもなくゴミ箱に捨てられるのである。

人間はここまで残虐になれるほどの文化を作り上げてしまった。この構造の中で生きていく限り、人間の残虐性から逃れることはできない。我々一人一人が、その残虐性の一部として生きてきたのである。動物保護、自然保護などを主張する前に、例え自分自身に非がないように思っても、無意識に我々が集団として担ってきた残虐性を自覚するところから始める必要がある。

### 2-2-3 工場式畜産の人や生態系への影響に関して

このように残虐な行為を伴いながらも、人口をまかなうために発展した畜産は、新興ウイルスの発生源、温暖化、土壌劣化、地下水汚染、森林破壊、砂漠化、化石燃料の消費など多様な環境問題と人間の健康悪化につながっている。例えば、熱帯雨林の森林伐採は、種の絶滅を招き、生物多様性の減少、砂漠化の大きな原因となっている。伐採の理由の 80%が農地開拓のためである。そして世界の農地の 70-80%が家畜の飼料を栽培するために利用されていると報告されている。また動物ベースの食事は、温暖化を 18%促進することが指摘されている。さらに、このまま肉食と乳製品の消費の増加が続けば、畜産とそのエサを作るための農業による温室効果ガスは 2050 年には、全体の 52%を超えると予測されている<sup>25</sup>。

---

<sup>22</sup> 同上 p.45

<sup>23</sup> 枝廣 [2018] pp.10-11

<sup>24</sup> 浅野 [2021] pp.47-48

<sup>25</sup> 桐村 [2021] pp.192-195

畜産・農耕は、生態系にも影響を与える。先述の通り、家畜の合計体重がヒトと野生の大型哺乳類の体重合計を遥かに凌いでおり、人が作った新たな環境および人間の活動に適応した生物は増える一方、適応できなかった生物は個体数を減らして絶滅している。すなわち生物多様性の喪失を招いているのだ。実際に人間活動の影響がなかった時代の絶滅率(100万種の生物のうち1年あたり絶滅する種の数)に比べて、現在の絶滅率はその数十倍から千倍以上にも高まっていると見積もられており、その背後には、農薬・肥料を大量投入した農業のあり方がある。先ほども述べた通り、畜産は大規模な農地開拓の背景にあり、モノカルチャー化した農業と畜産との間には密接な結びつきがある。農薬・肥料を大量投入した農業は、生物に生理的・遺伝的影響を与え、農薬に耐性がある昆虫、雑草、病原生物が蔓延している。海洋における富栄養化はプランクトンの大発生を招き、低酸素、無酸素により生物が生きることのできない状態になることで、生物多様性が損なわれている。また、大規模な単一作物の栽培により、モノカルチャー化することで、多様な生物の生息・生育に必要な環境の喪失が生じ、生物間相互作用を介して生態系に影響を与え、生物多様性の喪失を招いている。生物多様性は、人間の幸福を支える生態系サービスの喪失をも招く。具体的には、食料や燃料などの資源を供給するサービス、水の浄化や災害防止などの調整的サービス、余暇など精神的充足を与えてくれる文化的サービス、一次生産や生物間の関係などを支える基盤的サービスが損なわれるのだ<sup>26</sup>。

また工場的畜産は、新規感染症を引き起こすリスクとなる。劣悪な環境下で家畜は飼育されているため感染症の発症のリスクがあり、抗菌薬の使用により多剤耐性菌のリスクが高まっている。工場的畜産が招いた感染症の一例として、鳥インフルエンザの事例を紹介したいと思う。以下、高田礼人『ウイルスは悪者か お侍先生のウイルス学講義』を参照しながら述べる。

もともとA型インフルエンザウイルスは、カモのような野生水禽を自然宿主としており、鳥に対して広く高い病原性を示すものではなかった。だが、それがニワトリのような家禽に感染すると、ウイルスの振る舞い(すなわち形質)が次第に変化し、ニワトリに対して病原性を示すことがある。カモとニワトリは、同じ鳥類であっても種は異なり、そこには宿主の壁が存在する。カモの体内環境に適応したウイルスは、ニワトリへの感染には成功しても、ニワトリの間で効率よく増殖することはできない。つまり、この状況においては、ニワトリに対して病原性を示すこともなく、ウイルスはニワトリにとって少なくとも無害な存在である。

だが、すでに集約畜産あるいは工業的畜産について述べた通り、ニワトリは鶏舎で非常に密集して飼われているケースが多い。ウイルスは非効率ながらもニワトリの集団のなかで強引な感染を繰り返すうち、徐々にニワトリの体内環境に適応していく。ウイルスにと

---

<sup>26</sup> 鷺谷 [2020] pp.6-13、鷺谷 [2010] p.21

っては、新たに感染したニワトリの体内が選択圧となり<sup>28</sup>、ニワトリの体内環境で効率よく増殖できるウイルスが生まれてくる。宿主の体内に存在するウイルスの形質は多様で、「準種」を形成している。そのなかから、宿主の体内環境に適合した変異をたまたま持っていたウイルスが選択され優勢になる。その延長線上に、宿主であるニワトリを殺してまで自身を効率よく増殖させるウイルスが出現してくるのである。このように、病原性や致死性の高いウイルスが生まれてくることは、ウイルスにとっては一種の「事故（アクシデント）」のようなものである。「生命体」であるウイルスが、自身の生存を脅かす振る舞いをするのは不合理きわまりない。このウイルスが高い病原性や致死性を示すのは、「新しい宿主への感染」と「急速で強引な進化」という、二重の「事故」による偶然の産物なのである<sup>29</sup>。

また、肉食生活は人間の健康に直接的に結びついており、疾患リスクを高めることがわかってきた。肉を多く食べ、果物や野菜をあまり食べない欧米型の食生活は、心臓循環器系の病気やガンを発生させるなどの健康上の問題があり、欧米の食生活と比べて健康な食生活では、現状より 7350 億ドル、ベジタリアン食生活では 9730 億ドル、ヴィーガン食生活では 1 兆ドル以上の医療費削減ができると予測されている。これは、環状動脈性心臓病、脳卒中、二型糖尿病、がんの罹患率を下げるからである<sup>30</sup>。

以上の事実をまとめると、今日の工場的畜産による直接的、あるいは間接的影響により、熱帯雨林の森林伐採による種の絶滅や砂漠化、地球温暖化の悪化、モノカルチャー化した農耕の促進、生物多様性の喪失とそれによる生態系サービスの喪失、新規感染症の発生、薬剤耐性菌の増加、疾患リスクの上昇など、考えられるだけでもこれだけの多岐に渡る現象が人間と自然界生じていることになる。そして、それぞれの問題は密接に結びついており、工場畜産がウイルスの突然変異を促し、新規感染症リスクを高め、また抗菌薬の不正使用により薬剤耐性菌の感染症リスクが高まることはもちろんのこと、畜産が間接的に与えた生態系への影響は、再度、人間に対して感染症というあり方で返ってくるのだ。

例えば、森林伐採が行われることにより、前のような、野生動物と人や家畜との間での接触頻度が高まり、新規感染症のリスクを押し上げる。

地球温暖化も多岐に渡る影響を与えるが、例えば、気候変動により降水の量やパターンが変化し、蚊の発生数や、自然宿主の数が増加することもまた、感染症のリスクを高める。また、温暖化による冬季の気温上昇により蚊が越冬すること、夏季の最高気温上昇によって、蚊の発生数や自然宿主の数が増加することで、感染症のリスクが高まるのだ<sup>31</sup>。

---

<sup>28</sup> 特定の形質を持った個体ないし集団が環境条件によって選別されることを「自然選択」といい、進化の要因となる環境からの圧力を「選択圧」と呼ぶ。例えば宿主内の免疫細胞、抗体などが選択圧として働く。

<sup>29</sup> 高田 [2018] pp.89-90

<sup>30</sup> 鷺谷 [2020] p.31

<sup>31</sup> 環境省 [2006] pp.2-3

また、畜産とモノカルチャー化した農耕は、人の土、地球の土、いずれにもダメージを与え、腸内環境の悪化を招き、人間の免疫機能を低下させる。例えば、粘膜として外敵の進入に対する防御壁となっている抗体、IgA は、特定のウイルスや細菌だけに反応するのではなく、様々な種類の病原体に幅広く反応できる守備範囲の広さを特徴とするが、この IgA の分泌に重要な役割を果たしているのが腸内細菌であり、上記のプロセスの過程で製造された食品を食べることによって、腸内細菌の乱れが生じ、人間の免疫機能を低下させるのだ。その結果、感染症に対しても脆弱になるのである<sup>32</sup>。

このように、現代の工場の畜産が直接的あるいは間接的に、人を含む生態系の健康にダメージを与え、相互に悪影響を引き起こし、更なる感染症リスクを高めていること、生態系だけでなく人間の健康を非常に脆弱な状態にしていることは、自明となりつつある。ここまで見てきた結果、人間にとっても動物にとっても、そして生態系全体にとっても、工場的畜産を進めるメリットより、そのデメリットの方が遥かに大きいことが理解できるだろう。

#### 2-2-4 家畜化の発生と感染症との関係性、文明論的観点から

しかし、家畜と感染症の関係は、何も現代社会に限ったことではない。人間が定住化をはじめ、野生動物を家畜化した頃から、既に数多くの感染症が発生してきた事実が、最近の研究からは明らかになっている。

この節では、家畜の発生に関して、文明論的観点から検討していきたい。というのも、動物は何もはじめから家畜だったわけではなく、人間の介入によって家畜化されてきたわけである。動物がどのように家畜化されてきたのかを掘り下げ、感染症の起源に遡っていくのだ。

人類の歴史を紐解くならば、有史以来の感染症の大多数は家畜起源のものである、ということが今日の研究成果により明らかになっている。例えば、山本太郎は先述の著作の中で、家畜に起源をもつ感染症についての興味深い見解を提示している。

野生動物の家畜化は、動物に起源をもつウイルス感染症をヒト社会に持ち込んだ。天然痘はウシ、麻疹はイヌ、インフルエンザはアヒル、百日咳はブタあるいはイヌに起源をもつ。いうまでもないことだが、これらの動物は、群居性の動物で、ヒトが家畜化する以前からユーラシア大陸の広大な草原で群れをなして暮らしていた<sup>33</sup>。

同様の指摘は、ジャレド・ダイヤモンドの『銃・病原菌・鉄』の中にも見られる。彼によれば、人間特有の病気を引き起こす病原菌には、分子生物学的に近い近縁種があり、こ

---

<sup>32</sup> 桐村 [2021] pp.144-146 p.95

<sup>33</sup> 山本太郎『感染症と文明—共生への道』,岩波書店,2011,p.35



これは、家畜やペットなど人間と近い関係にある動物の体内に存在するという。そして、家畜化された動物からの恐ろしい贈り物こそが、病原菌なのである<sup>34</sup>。

多くの論者によって、人間の感染症は家畜起源であることが主張されているが、感染症流行に影響を与えたのは何も家畜だけではない。人間の農耕の開始と定住化も同時進行的に感染症流行を招く原因となった。広井良典は『無と意識の人類史 私たちはどこへ向かうのか』の中で、アメリカの生態学者ディーヴェイの図式を取り上げながら、世界人口の拡大・成長・定常化に関する三つのサイクルを紹介している。図2で提示されている順に紹介すると、第一のサイクルは私たちの祖先である現生人類（ホモ・サピエンス）が地球上に登場して以来の狩猟採集段階であり、第二のサイクルは約1万年前に農耕が始まって以降の拡大・成長期とその成熟、第三のサイクルは近代資本主義の勃興あるいは産業革命以降ここ300-400年前後の拡大・成長期を指す<sup>35</sup>。

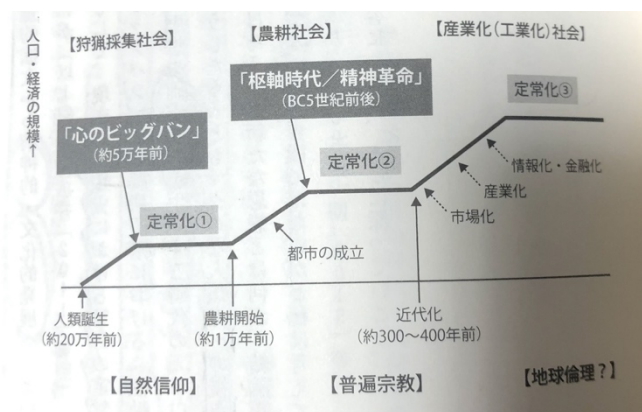


図2 人類史における拡大・成長と定常化のサイクル<sup>36</sup>

この三つのサイクルの中で農耕と動物の家畜化、定住革命が本格的に勃興したのは約1万年前に遡ることができる。すなわち、3つのサイクルのうち第二のサイクルである。この時代、農耕が本格的に開始され、食料の増産と貯蓄が可能になり、人々は定住化することができるようになった。また、狩猟採集時代の時は移動が激しかったため、女性の妊娠・出産の期間が限られていたが、定住化することによってその頻度は高まり、急速な人口増加を招いた。そしてさらなる食料が必要になり、人々は動物を家畜化し、農耕を拡大させていったのである。

この環境が感染症にとっては格好の土壌となった。山本太郎は上述の著作の中で、以下のように述べるように、食料増産と定住は人口増加をもたらし、これが新たな感染症の流行に格好の土壌を提供した。一方野生動物の家畜化は、耕作面積の拡大などを通して、食

<sup>34</sup> ジャレド・ダイヤモンド『銃・病原菌・鉄、上』,草思社,2012,p381

<sup>35</sup> 広井良典『無と意識の人類史 私たちはどこへ向かうのか』,東洋経済新報社,2021,p74

<sup>36</sup> 広井 [2021] p.81

料増産に寄与した。同時に、本来野生動物を宿主としていた病原体はヒトという新たな宿主を得て多様性を一気に増加させたのである。ここからわかるように、農耕革命、定住化、そして野生動物の家畜化を通じて、人類の脅威となる感染症が、次第に蔓延していったのである。しかしながら、人間の活動はとどまることを知らない。人類は第三のサイクル、近代資本主義の時代を迎え、さらなる人口増加をとげた。このことと並行して、家畜化はさらに進行したのである。先ほど紹介した、工場畜産の発生にも繋がってくる流れである。

前節も踏まえると、約1万年前に農耕が始まって以降の拡大・成長期とその成熟である第二のサイクルにおいて、家畜化と人口増加が進み、人畜共通感染症が蔓延したこと、そして、近代資本主義の勃興あるいは産業革命以降の拡大・成長期の第三のサイクルにおいて、集約畜産や工業畜産、人口増加、さらには科学技術の発展による科学実験が重なって、生態系の変化、気候変動など、動物やウイルスにとって激動の時代が到来し、致死的な人畜感染症がより生じやすい環境となっていることがわかった。

## 2-3 解決策としての考え方と実践

### 2-3-1 動物福祉(Animal welfare)

こうした状況の中で、近年、動物福祉(Animal welfare)という考え方と実践が着目されている。アニマルウェルフェア (Animal Welfare) とは、感受性を持つ生き物としての家畜に心を寄り添わせ、その誕生から死を迎えるまでの間、ストレスをできる限り少なくし、行動要求が満たされた健康的な生活ができる飼育方法をめざす畜産のあり方を指す。これは、欧州発の考え方で、日本では「動物福祉」や「家畜福祉」と訳されてきた<sup>37</sup>。

1960年代のイギリスでは、工業的な畜産のあり方を批判した、ルース・ハリソン氏の『アニマル・マシーン』が出版され、大きな関心を呼んだ。イギリス政府が立ち上げた委員会は、「すべての家畜に、立つ、寝る、向きを変える、身繕いする、手足を伸ばす自由を」という基準を提唱し、こうした動きを受け、家畜の劣悪な飼育環境を改善させ、ウェルフェア（満たされて生きる状態）を確立するために、次の「5つの自由」が定められた。これは、

- ① 空腹および渇きからの自由
- ② 不快からの自由
- ③ 苦痛、損傷、疾病からの自由
- ④ 正常行動発現の自由

---

<sup>37</sup> 一般社団法人 アニマルウェルフェア畜産協会

⑤ 恐怖および苦悩からの自由

の5つのことである<sup>38</sup>。

なお、国際的な動物保護 NGO ワールド・アニマル・プロテクションによる畜産動物の保護に関する国際評価(2020年)によると、A~G ランクのうち、日本は E ランクであり、欧米諸国のうち、スウェーデンやイギリス、オランダが B ランク、アジアでもインドやマレーシアが C ランクであることと比べると、とても低い値を示していることがわかる。

ワールド・アニマル・プロテクションのホームページによると、評価の基準となっている指標とは、

- ① 動物の感覚の認識と動物の苦痛の禁止(この目標では、動物の感覚が法律で認められているかどうかを評価し、動物虐待の禁止など、動物に認められている中核的な法律上の保護について検討する)
- ② 動物福祉法の存在(この目標では、農場動物、飼育動物、コンパニオンアニマル、労働動物、娯楽用動物、科学研究用動物、野生動物など、さまざまなカテゴリーの動物に関する動物保護法について検討する)
- ③ 支援する政府機関の設立(この目標は、政府の動物保護への取り組みを検証するものである。これには、政府内に動物保護のための責任、説明責任、資源の配分があるかどうかが含まれる)
- ④ 国際的な動物福祉基準の支持(この目標は、世界動物保健機関(OIE)の動物福祉基準が法律や政策に組み込まれているかどうか、また、政府が動物福祉に関する世界宣言を支持しているかどうかを見るものである)

の4つである<sup>39</sup>。ちなみに、残念ながら日本はどの項目も低い評価となっている。とはいえ、日本にもアニマルウェルフェアを意識した取り組みがない訳ではなく、2016年、アニマルウェルフェアに関するセミナーや農場・屠場の見学会などに取り組んできた「北海道・農業と動物福祉の研究会」を法人化する形で、(一般社団法人)アニマルウェルフェア畜産協会が設立された。消費者も「エシカル消費」への関心を持つ人が増えており、アニマルウェルフェアや環境に配慮した消費を意識する人が増えてきている。しかし、社会全般、特に企業の取り組みはまだこれからというところである<sup>40</sup>。

ここまで、動物福祉(Animal welfare)に関して、紹介してきたが、ここで注意しなければいけないのが、この動物福祉の議論では、家畜を飼育することを前提として、家畜の飼育環境をなるべく自然と同じ姿にしていくことに重点を置いていることである。つまり、家畜そのものは認めており、動物を家畜化することに反対する運動ではないということである。

家畜と感染症という関係から考えても、人類が行ってきた家畜化は先史時代から続いて

---

<sup>38</sup> (一般社団法人)アニマルウェルフェア畜産協会の HP より

<sup>39</sup> World animal protection 「animal protection index」

<sup>40</sup> 枝廣 [2018] p.63

いる。今日の工場畜産の現状は、同じ構造がさらに加速化したものにすぎず、家畜化とそれに伴う感染症の脅威という構造自体は何ら変わっていないのである。

よって、私たちは次のような問いを立てる必要があるだろう。「動物を家畜化して殺すことは正当なのかどうか？」という問いである。この問いについて次の節で考察していきたい。

### 2-3-2 家畜倫理～倫理学から学ぶ～

「動物を家畜化して殺すことは正当なのかどうか？」という問いに対して、もちろんここでは正当でないというのが解答である。というのも、上記の5つの自由は殺されてしまえば全てが奪われると考えるからだ。5つの自由があるから殺しても構わないというのは、人間が殺して食べるまでせめてもの自由は与えてあげるといった非常に歪んだ愛情だと感じる。

例えば、ベジタリアン哲学者の浅野幸治は5つの自由に加えて、殺害からの自由を第6の自由として加えることを主張している<sup>41</sup>。

浅野は主張の前提として、三つの基本的動物権をあげる。彼によれば、人間と他の動物は、同じような細胞や器官からできていて同様の快苦を感じるので、三つの基本的動物権があるというのだ。三つの基本的動物権とは、生命権と身体的安全保障権と行動の自由権である。生命権とは、殺されない権利であり、身体的安全保障権とは、傷つけられない権利であり、行動の自由権とは、行動の自由を奪われない権利である<sup>42</sup>。

動物福祉論は、5つの自由は尊重しなければいけないと主張するが、殺害からの自由は尊重しなくて良いと考えるのであれば、それは内的に不整合をきたす。動物は、殺されてしまうならば、その種にとっての本性的な活動をすることができなくなり、結果的に5つの自由全ても否定されてしまうからである<sup>44</sup>。

一方で、動物権利論は一定の条件のもとでの動物の飼育を許容する。その条件とは、①動物をさず、②広い自然的な環境で、その種に本性的な活動を自由に行うことができるようにし、③動物にとって、飼育されることから来る不都合(不利益)よりも飼育されることから得られる便益の方が十分に大きい場合、である<sup>45</sup>。

こうした条件が満たされるなら、酪農や採卵が許容されると考えるのだ。利益とは、安全と食料、さらには医療が考えられ、不利益には、自由の部分的制約、乳や卵が取られることがあげられる。なお、動物権理論の中では、動物飼育を一切認めない立場と一定の条件のも

---

<sup>41</sup> 浅野 [2021] p.52

<sup>42</sup> 浅野 [2021] p.11、p.25

<sup>44</sup> 同上 p.53

<sup>45</sup> 同上 p.55

とでなら酪農や採卵は許容されると考える両方の立場がある<sup>46</sup>。

さて、ここまでは動物福祉の必要性を認めつつも、動物福祉を批判的に吟味し、ある種、動物福祉の概念を完成させるような形で家畜倫理に関する各種の議論を述べてきた。以下では、個人の内的な変容に関して述べていく。

### 2-3-3 具体的実践～身近な経験から学ぶ～

ここからは、身近な例から、上記の現状に対するアプローチの仕方について検討していきたい。なお、個人的経験に関わる話が多く含まれるため、恐縮ではあるが、少々お付き合いいただきたい。実際に、私自身、現段階で、完全な菜食主義には至っていないが、動物の肉食をやめるところから始めている。なぜなら、上記にも述べた通り、動物の家畜化そのものが動物の権利を剥奪しさらに動物の生を抑圧してしまう構造を知ったため、そのようなあり方に反対の立場を示しているからである。

しかし、依然としてまだ魚肉は食べているため、現段階ではペスカタリアンという立場であるといえる。「ペスカ」とはイタリア語で魚の意味を持つ「pesce」に由来し、「タリアン」は主義者の意味を持つ「arian」に由来するものである。つまり、牛や豚などの肉類は食べないものの、魚介類は食べる菜食主義者のことを指している。また、ペスカタリアンには、肉は食べないものの魚や卵、乳製品などは食べている人もいる。

この生活をスタートしたのは2021年の6月頃で、そこから半年ほどの歳月が経つが、今のところ食事に関しては全く問題がない。ただ、私が肉を食べるのをやめるということで周囲から笑われたり、一緒に食事をする際に面倒に思われたり、私が肉を食べないと公言しているにも関わらず、大人数の場では肉と一緒に食べた方がいいと進められ、ある種仕方がなく食べたこともある。この半年だけでこのようなケースを度々経験した。このようなプロセスの中で、私は、動物の抑圧構造を解放したくて肉食をやめようとした。しかし、そのあり方が他者にとっての何かしらの抑圧構造を刺激し、私に対する反感となって現れることで、私のあり方が抑圧されてく、まさに抑圧の連鎖とでも呼ぶべき現象が起きたのである。非常に悲しい現状がここにはある。

私自身は、周囲の人に対して肉食をやめるべきだと強要したことは一度もないのだが、私が肉を食べないということだけで周りに圧を与えていると感じさせてしまうこともあるようだ。しかし、これは私自身の選択でもあるため、周囲の反応を気にするのも仕方がないと考えている。今後、徐々にヴィーガンに移行していくことを考えているが、色々と興味深い学びも多いので、自分自身の経験も、研究の一貫として捉えていきたい。

多くの人には、肉食をやめることは今まで愛着の持っていた食事を手放す苦痛を伴うことだと考えるかもしれない。それがヴィーガンやベジタリアンに対するある種の嫌悪感とし

---

<sup>46</sup> 同上 pp.55-56

て現れているように感じる。確かに、慣れた食事を手放すことにはある種の寂しさがあることも確かだろう。

しかし、手放すことに苦痛を伴うという点に関しては懐疑的である。というのも、私自身肉食をやめるというのは、ある種自然な成り行きでもあった。小さい頃から肉食で育ったにも関わらずやめられたのである。

振り返れば、家畜の歴史や人類の歴史を知っていくにつれ、人間が定住革命を始めて以降、人間と自然界との関わりは改善するどころかさらに悪化したということを痛感するようになり、私はどうしたらいいのだろうと途方にくれた事が、その大きな要因になっていたのだと思う。人も自然界も海も空も川も草原も、さらに言えば、様々な宗教的あるいは信念のバックグラウンドを持っている人達が、共に生きていく道はないのかという問いを抱き、その結果、生き方から変わりつつ、具体的な提案をしながら行動に移していけないものかと考えていた。

その後、まずは自分ができることから始めようと思い、今後の大きな流れの一環として肉食をやめるという決心が生じたように思う。最初は、意識的にやめようとも考えていたが、いざやめ出した時には、意識的にやめようといった強制的なものというよりも、身体が自然と動物食を求めなくなったというのが正しい。後ほど詳しく書くが、私自身は、野口整体という整体技術を私生活の中に取り入れている。その過程の中で、心身が弛緩することによって、発熱が生じることがあるが、私はこの発熱のプロセスを経験して熱が下がった頃から、肉を求めなくなったのである。野口整体の中には身体の要求に任せるという考え方があり、ちょうど私の身体が肉を要求しなくなっていたとも考えられるだろう。

つまり、ここで述べたいのは、移行のプロセスというものが、自然界と自己との関わりの中で生じてくるものであり、その根底には、私を超えた大きな流れによって、身体レベルでの変容が生じたということである。少々誇張した表現になるが、肉食をやめるという非常に些細な出来事背景には、私の意思を超えた変容があったように思える。

ここで伝えておきたいことは、何かしらの行動を実践する際、まずは倫理的道德をしっかり述べるのが重要ではあるもの、倫理的道德だけで人々を動かそうとしても、そこには何かしらの限界があるということだ。なぜならそれらの考え方が他者にとって抑圧的になる可能性すらあるからだ。それが、私が肉食を食べるのをやめた時の反応として現れているようにも思える。

既に触れたの通り、私は動物の抑圧構造を解放したくて、肉食をやめようとした。しかしそのあり方が他者にとっては何かしらの抑圧構造を刺激し、私に対する反感となって現れ、私のあり方を抑圧する、まさに抑圧の連鎖とでも呼ぶ現象が起きた。倫理的道德は反発や無関心を再生産する可能性もある。なぜなら人は、社会的抑圧、つまり、こうせねばならないという考え方に心底疲れているからである。学校で、職場で、あるいは家庭内で、社会的要請・課題・規範・あるいは常識といった視線に対応することで精一杯だからだ。この問題は何も肉食に限らず、例えば地域の一次産業のあり方や、あるいは森林保

護、野生動物や家畜の保護を主張する際などあらゆる環境保全、自然保護の議論においても同じ構図をとる。

いくら正当性を主張しても、そうするしかないような外力、あるいは主体的な変容に基づく内的な力のいずれかがないと、変革は生じない。ここでいう外力とは、環境問題を科学的実証的に認識し、「予見と計画に基づいて」、より環境に負荷のかからない持続可能な世界を政治的経済的システムによる制御によって創造しようとする力であり<sup>47</sup>、一方で内力とは、個々人の問題意識、あるいは何かしらの気づきによって変容がもたらされていく力のことを指す。これら二つの視点は、一見相反するようにも見えるし、実際に必ずしも連続的に接続される訳ではないが(例えば外的な制度が変わったからといって内的な意識変容が生じるとは限らないし、その逆もまた然りである)、個々人の生き方において双方の視点が含まれているのは事実である。

#### 2-3-4 いじめと癒しの構図から学ぶ、人と自然のいのちのつながり～ 心理構造から学ぶ～

前節では、抑圧の連鎖と倫理的道德の必要性、そしてその限界点について述べた。これらのプロセスは、様々な人間の立場や経験そして感情が複雑に入り込んでおり、たいしたことのない問題のように見えても、実はその深層が非常に複雑であることが多い。

本節では、まず、吉田敦彦の『ホリスティック教育論 日本の動向と思想の地平』で紹介されている「いじめ」と「癒し」の構図から学んでいきたいと思う。

例えば、いじめ問題を外的な力で解決するとしたら、いじめをした生徒を法的に取り締まれるような制度を整えること、あるいは、いじめをしたら停学処分にするような規則を作る事が考えられる。確かに、倫理的正当性を訴えたとしても、その実行力は弱く、更なるいじめを生み出しかねないので、外的拘束力によって問題を解決するというのは一つの手段ではである。しかし、先ほど述べたように、そのような外的拘束力は更なる抑圧を生むことになり、場合によってはいじめを超えるような問題が起こりかねない。ここで吉田は、いじめ対策の発想法の転換について述べる。

いじめへの対策を考えていくときには、いじめという行為が悪い行為であるということ  
を頭で理解し、いじめたくなる衝動(心・身体)をいかにして理性的知的に抑えるか、と  
いう方向で発想していきがちだ。「いじめ」と聞くと、悪いか悪くないか、で考え、楽  
しいか楽しくないか、などとは発想しない。理性的知的に分別する頭のはたらきに対し

---

<sup>47</sup> 吉田 [1999] p.134

て、心や身体のはたらきをそれに対立するものと見なし、頭を優位において、心や身体をコントロールし抑制することを教える<sup>48</sup>。

その発想の延長線上では、「いじめ追放対策」をうてばうつほど、悪循環を生むばかりだろう。いじめには、頭に支配されて抑圧された心や身体のストレスの発散という側面があるからだ<sup>49</sup>。

吉田はこのように述べながら、身体が感じとる喜び＝楽しさの質こそが問われていると考える。「むかつき」をいじめによってスカッとさせる「楽しさ＝喜び」に対して、仲良くする楽しさ、いじめるよりももっと深くて後味のよい喜びをいかに汲み上げることができないかと考えるのだ。

そしてその分析方法として、彼はホリスティック心理学の手法をとっている。「むかつき」がムラムラと湧き、ストレスが溜まっているのは、無意識のなかでもその表層部分、意識と無意識の境目の部分であり、意識の側から常に抑圧され、コンプレックスの渦巻く個人的無意識のレベルに相当する。これについては、図4を参照していただきたい。一時的に「いじめてスカッとする」のはこのレベルの解放であるのに対し、そのレベルを突き抜けた深層の無意識には、「いのちとつながる喜び」があふれ出る後味もよい心の底からの楽しさの源泉があると考えられる。

心の底からワクワク、イキイキすることの源が大文字の<セルフ(Self)>、<自己>である。他方で、分別をはたらかせてやるべきことを決め、自分の感情や行動をコントロールする働きは<自我(ego)>のはたらきだといえる。自我領域は最低限の自己のコントロールに必要なものではあるが、意に反して外から迫られる課題が過剰になると、自分の内部から湧き起こるエネルギーに目を向ける余裕がなくなり、あるいは内から湧き上がるものを知らず知らずのうちに抑え込んで抑圧することで、意識と無意識の境界、すなわち、無意識の比較的浅い層に、モヤモヤやイライラのような否定的な感情、通常、コンプレックスと呼ばれる感情をため込むようになるのだ<sup>50</sup>。

いじめにつながる「むかつく」という感情は、抑圧されているコンプレックスが、刺激されて、ムカムカと動き出す状態だと理解できる。それは自分がしががっている社会的基準からすれば、「そうあってはならない」はずなのに、その基準から外れて生きている比較対象に出会って刺激されたとき、ムクムク・イライラと動き出す。そう生きられず、我慢し、抑圧してきた自分<生きられなかったもう一人の私>がムカムカと動き出すが、このムカムカの中身を認めることは、これまで無理を重ねて従ってきた社会基準と自分の生きざまとを否定することになるため、今までの自分を否定することになる。そのため、比

---

<sup>48</sup> 吉田 [1999] p.43

<sup>49</sup> 吉田 [1999] p.43

<sup>50</sup> 同上 pp.44-47



較対象となる子を否定して、「そうあってはならない」ということを強い反動をもって、確認しに行くのだ。それがいじめという形態をとるのではないだろうか？そして、「いじめは絶対にすべきではない」という基準で指導すると、内側の<自己>をますます抑圧していく方向にはたらき、渦巻くコンプレックスは深まることで、イライラはたまり、悪循環に陥っていく<sup>51</sup>。

よって、その根本的解決のためには、一人ひとりが、自分の<自己>からの声に耳を傾け、そのエネルギーに則ってイキイキと生きることが重要である。イライラを鎮めるには、イライラと向き合ってイライラを抑えようとイライラするのではなく、発想を切り替えて、楽しいことを始めてみるほうが早い。すなわち、「喜びがいじめを超える」という構図である。しかしこれは単なる楽観主義ではなく理性のコントロールで悪を抑制できるとする理性主義的な楽観主義に深く絶望し、悲観するからこそ生じる、選り取られた楽観主義である。例えば、メキシコ人は「いじめるよりも仲よくしたほうが楽しいのに」と語り、本当の喜びを味わうことによって、いじめを超えていくという発想を彼らの教育の中で取り入れているが、それは楽観的だからというよりも、それだけ悲観が深いからであるという。スペインに征服されて以来、正義やヒューマニズムの名のもとに蹂躪された数々の悲劇を体験してきたからこそその、深い陰影を落とす明るさでもあるのだ<sup>52</sup>。

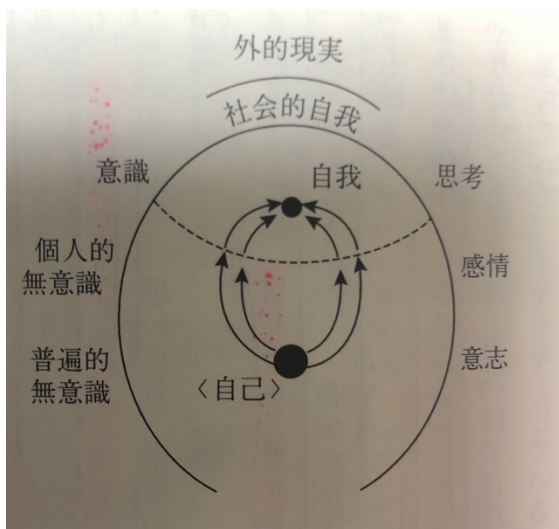


図3 吉田による心のモデル図:自我と<自己><sup>53</sup>

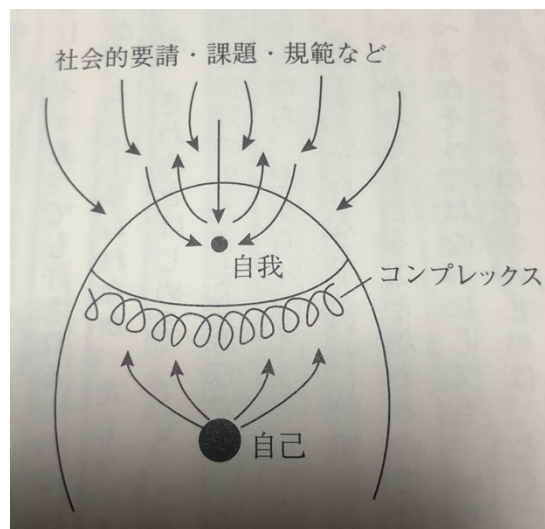


図4 引き裂かれた自我と<自己><sup>54</sup>

なお、上記で吉田の議論をもとにいじめる側の心理構造を扱ってきたが、いくら自己の抑圧による反動によっていじめという表出があったからといって、いじめという事実その

<sup>51</sup> 同上 pp.47-49

<sup>52</sup> 同上 pp.49-51

<sup>53</sup> 同上 p.45

<sup>54</sup> 同上 p.47

ものが取り消されるものではないことを補足しておく必要がある。というのも、いじめができるということは、ある種内的な抑圧を外に吐き出すことで解消できる状態にあるのだが、いじめられた側は、仮にその人がいじめをするような人でない場合、内的な抑圧と葛藤を抱えて生きていくことになるからだ。その葛藤が外部に放出できない場合、それは自己に向かい、自己破壊をもたらすことさえあるだろう。また、倫理的正義感に突き動かされて動いた場合にも、その立場は周囲からの反感や反発をもたらし、いじめを止めようとしたことにより、かえっていじめられてしまうといったケースを招く。そして、いじめられたことにより、意見が言えなくなり、内的破壊に向かってしまうといった、何よりも悲惨な事態が生じさせてしまうのだ。ここで重要なのは、どんな立場であっても、外部に向ける苛立ちや葛藤を自分自身の中で受け入れるところから始め、自分がどんな世界を望んでいるのか、自己の奥深くにあるニーズに応答する事である。例えば、外部に自分を誇大に見せ、その延長線上でいじめを繰り返している人間は、何かしら自己の中に如何ともしがたい寂しさを抱えているのかもしれない。そのニーズに、本人自信が気づけていないのである。そして正義的倫理で戦おうとする人の中には、みんなが幸せで、喜びで溢れてほしいというニーズがあるのかもしれない。この双方の心の深層のニーズに向き合えたとき、お互いを労り、互いの願いのために生きていくことがあり得るだろう。

なお、ここでいじめの議論を詳細に取り上げたのは、筆者自身が、中高生時代にある種の正義的本能に突き動かされ、同級生のいじめを止めようと試みたものの、そのことがきっかけとなって、周囲からのいじめにあったという経緯が関係している。自分自身が、外部に戦っていくようなパーソナリティーを持っていなかったために、その当時は笑ってすませていたが、後々、それは心の中の大きな傷として残り、同様の構造からくる体験を繰り返すことで、最終的に自己破壊衝動へと陥った経緯があり、今回の考察に追加させてもらった。

以上、いじめの心理的抑圧構造や、ある種のいのちの解放としての喜びや楽しさについて、そしてそこからさらに考察を進め、内的葛藤の受容と深層ニーズの気づきについて述べてきたが、以上のことは家畜倫理の話、森林保護、野生動物の保全、環境保全、自然保護の議論などあらゆる環境倫理の話にもつながってくるものである。これらの環境倫理に関しても、「環境破壊は絶対にすべきではない」という基準で指導すると、内側の<自己>をますます抑圧していく方向に働くことでコンプレックスは深まり、イライラがたまって悪循環に陥ってしまう。この環境破壊という構図は、その人を超えて社会構造の中で作られたものでもあり、自己のどこか深層にある環境を守りたくても守れなかった、そのようには生きられなかったという自己の葛藤を生じさせ、苛立ちを覚えさせてしまうのだ。

よって、例えば、自然豊かな環境に行き、みんなでハイキングでもしながら、太陽の恵みと大自然の透き通った水のもと、土壌に気を遣い農薬も使っていないお野菜を調理して作ったお昼ご飯をみんなで分かち合うことができたなら、その美味しさに感謝し、自然に根付く豊かさを心底感じる機会になるだろうし、何より自己<Self>の喜びが満たされてく

ることになるだろう。あるいは、広大な草原で、動物と触れ合う時間を取れたら、人間と動物の関係は、破壊や保全といった関係性を超えて、友としての関係性を築き始めるだろう。そんな時間を過ごしながら、雄大な自然の時間に触れ、その中で今の世界で起きている環境問題のテーマについて話し合うだけでも随分違うだろう。そして、自然界の中で時間を過ごしていくにつれ、いくら奪われても決して途絶えることのない自然の力を感じることができたなら、そして、その大自然の生かす力に身を委ねながら、自然界にとって心地よいあり方が自己<Self>にとっても心地よいあり方だと気づけたなら、その人の生き方は、自然の力を破壊する生き方から自然の力を生かす生き方へと変容するだろう。

ここで重要になってくるのは、いじめの問題の際に、いじめの否定よりも深層の喜びや楽しさを汲み上げることができるかどうかを考えたように、自然破壊の否定の代わりに、自然界との関わりの中で自己<Self>の深層の喜びや楽しさを味わい、そして自然の生き生きとした力、すべてを生かす力、いのちの流れとでも言える力に身を委ねていく中で、自然のいのちと出会い、いのちによって自然とつながることである。それは、いのちを介した自然との出会いであり、深層の自己<Self>において、自分を越えた他者や自然界とつながり、そこからさらに生き生きとした力が生み出されるという循環を形成する。そのつながりが一度作られたら、そこから生じる現実の行動も自己を超えた他者や自然との関わりをより楽しめるような行動へと変化するだろう。

実際に、吉田は先ほどの図3に示したように「喜びの源」としての<自己>は同時に「意志」の源でもあると述べる。そして個人的無意識に感情を、自我の働きに「思考」を当てはめることによって、意志、感情、思考の関係性を捉え、自分が本当に求めているやりたいことは意志に基づいており、それが深く自己に基づくものであれば、決して個人的なものではなく、むしろその心の奥底で自分を越えた他者や他の生命たちともつながっていると考える。そして、その<いのちのつながり>から湧き出てくるものが、ここでいう「意志」であると考えられる。したがってそれは、個人の計らいを超えた共同性をもつと述べている。実際に、図5のように、私の自己と他者の他己は、深層のいのちを介して繋がっている<sup>55</sup>。(図5)

この吉田の我と汝の関係を我と自然との関係で考えてみるとわかりやすいだろう。

---

<sup>55</sup> 同上 pp.53-60

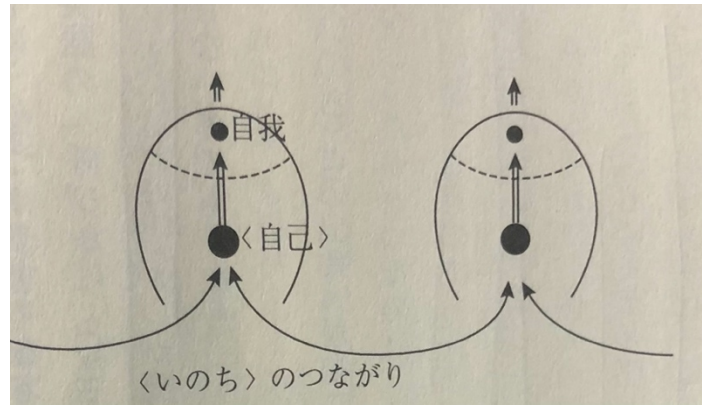


図5 吉田による<いのち>と出会う<我と汝>の図<sup>56</sup>

このような内容を理解することによって、上記の個人的経験の紹介文で述べた「移行のプロセスというものが、自然界と自己との関わりの中で生じてくるものであり、その根底には、私を超えた大きな流れによって、身体レベルでの変容が生じたということである。少々誇張した表現になるが、肉食をやめるという非常に些細な出来事の背景には、私の意思を超えた変容があったように思える」という内容が、根拠を持って理解できる。すなわち、私の行動を実行させた意志は、個人的なものではなく、むしろその心の奥底で自分を超えた他者や他の生命たちとつながりを持っているのであって、その意志によって行動しているため、こうしなければいけないといった抑圧的な思考に基づく行動というよりも、自然な流れとして肉食を断つという行動に至ったように考えられるのだ。

### 3章 本論文の問い-なぜ人と人の中で、あるいは人と自然界の間での抑圧構造の連鎖が続いているのか?-

#### 3-1 支配被支配構造の発生と解放に向けたアイデア

##### 3-1-1 支配被支配の関係はどのようにして生じるのか? ~歴史から学ぶ~

前節では、非常に身近な例から、抑圧の連鎖について、そして「喜びがいじめを超える」という発想からあらゆる環境倫理の議論に関しても、「喜びが抑圧を超える」という発想を一つの選択として考察した。また、行動変容の背後には、実は、自分を超えた他者や他の生命

<sup>56</sup> 同上 p.60

たちとつながった意志によって動かされていると考えることもできるということ考察した。しかし、ここで疑問が残るのが、そもそも、なぜこのような抑圧構造の連鎖が続いているのかということである。そこで本論文では、「なぜ人と人の中で、あるいは人と自然界の間での抑圧構造の連鎖が続いているのか？」という問いをもとに、抑圧構造の連鎖は果たしてどのようにして生じたのか考察していきたい。しかしこの問いに即座に答えを出すことは不可能に近いともいえる。なぜなら、抑圧構造が連鎖的につながっている場合、その抑圧構造は世代をまたぎ、地域の中で、ある種の文化として引き継がれていってしまっているからだ。それぞれの個別事象に向き合っていくだけでは限界が出てしまうからである。大局的な抑圧構造の理解を挟まずに局所問題にのみ焦点を当て取り組んでも、それはかえって、大局的な抑圧構造の再生産を局所部分が担わされてしまうという構図から抜け出せないため、この節では、大局的な抑圧構造の分析を可能な限り行ってみることにする。

さて、以前も述べた通り、動物の人間による家畜化、さらには自然界の植物に手を加える農耕とい形態を取りだしたのは、広井による図2の3つのサイクルのうち、第二のサイクルの時である。繰り返しになるが、この時代、農耕が本格的に開始され、食料の増産と貯蓄が可能になり、人々は定住化することができるようになった。また狩猟採集時代の時には移動が激しく、女性は妊娠出産の期間が限られていたが、定住することによって女性の妊娠出産の頻度は高まり、急速な人口増加を招いた。そしてさらなる食料が必要になり、人々は動物の家畜化と農耕を拡大させていったのである。そして、その背後には国家の誕生があったと考えられる。

もちろん後述するが、物事は単純ではない。例えば先日、私はアイヌ民族の方から、大局的な歴史観で物事を解釈することに対してかなりの批判を受けた。というのも、大きな組織へと発展せず、ミニシステム状態を保ち続けてきた数多くの少数民族においては、そもそも国家の誕生という歴史は、自分たちの生活とは無縁であり、それにも関わらず、彼らから一方的に抑圧され、支配されたという歴史を持つからである。少数民族にとっての歴史認識は、大局的な歴史認識とは異なる。実際の個別具体的な時代認識は、フィールドワークを通じて人類学的手法を通じて明らかにしていく必要があるだろう。とはいえ、アイヌ民族をはじめとする多くの民族が、大局的な歴史観によって、ある種翻弄され、搾取や剥奪を受けてきたのは事実であり、その背景を明らかにしていく必要があるのも事実であるため、ここではあえて大局的な歴史観でもって記述を進めていく。

では、定住革命において具体的にどのような事が生じたのだろうか？ここからは、西田正規『人類史のなかの定住革命』と、ジェームズ・C・スコット『反穀物の人類史 国家誕生のディープヒストリー』における記述をもとに、定住革命と国家の登場にいたる経緯を、整理してみる。

気候の温暖化が始まる B.C.10000 年以前、人類の生活スタイルは基本的に遊動的であった。狩猟採集民や遊牧民は、離合集散を繰り返す小さなグループに分かれて行動していた。彼らがキャンプを移動させる理由としては、インド洋の東端に浮かぶアンダマン島に

住む狩猟採集民を調査したラドクリフ＝ブラウンがまとめるように、①死者が出た時、②狩りや漁に便利な場所への移動、③季節風を避けての移動、④ゴミの蓄積による環境悪化による移動があった。その他にも、キャンプサイズの調節や儀礼、行事などを行うための移動・集合が頻繁にあったことが記録されている。

遊動生活をしている人類は、食べ物の皮や残りカス、排泄物のゆくえについてほとんど注意を払わない。というのも、遊動生活の大きな利点は、あらゆる種類の環境汚染をキャンプの移動によって消去できることにあるからだ。他方で、病弱な人や高齢の人が移動についていくことは困難であったとされる。病気で亡くなった人は埋葬されることなく、キャンプは次の場所へと移動していったと考えられる。集団の数はおよそ 100~250（目安は 150）人以下に制限されており、この限界値を超える集団を作ることは難しかったとされる。これは、人類と他の霊長類の脳の大きさの比較から、グループの団結と安定性を維持できる人数を割り出したダンバー数と呼ばれるものである。遊動時代の人類は 150 人前後の集団で移動していたのだ。

B.C.10000 年から、地球の温暖化が進み、人類は定住を始めたとされる。しかし、実際この頃から生じた定住は、通説とは異なり、いわゆる農耕・牧畜のための定住ではなかった。

通常、農耕の始まりは、通常、乾燥地帯に水を引いてきて米や小麦などの穀物を栽培するイメージで語られる。しかし、例えば、メソポタミア文明で有名なイラク南部は、この当時、乾燥地帯というよりはむしろ湿地帯であり、灌漑の必要はなかった。ティグリス・ユーフラテス三角州は現在よりも大幅に海進が起っており、年々の堆積物が重なる前の沖積層は、現在の水準よりも 10 メートル以上低かったとされる。つまり、灌漑による大規模な穀物栽培などしなくても、ほぼ自生植物や海洋資源だけに依存していれば良かったのだ。

沖積層の土壌たっぷりの栄養を含んだ二つの大河の河口においては、並外れて豊かな水辺の生活が生み出され、膨大な魚類やミズガメ、鳥類、哺乳類そして、遊動生活をしていた人類も引きよせられた。人類は、栄養豊富な湿地帯にとどまるようになり、そこで狩猟採集を行ったと考えられる。あわせて、初期の農耕・牧畜も始まったようだが、それは、この湿地帯の資源が豊富で、そこに留まっている間に行われた簡易的なものであった。穀物が当時の主食だったわけではなく、豆や果実などがメインで作られた。また、家畜も、その湿地帯に集まってきていた動物の一部を飼い慣らす程度で、大規模な牧畜は行われていなかった。

この時代の農耕・牧畜は、あくまで狩猟・採集の追加的要素に過ぎず、湿地帯の栄養が少なくなってくると、人類はその土地を離れ、別の湿地帯へと移動した。従って、彼らの

耕作地も放棄されたのである。この時代の定住は、あくまで選択的な定住であったと言えるだろう<sup>57</sup>。

例えば、氷河期から温暖化への移行期となった B.C.10000 年頃、人類の人口は 400 万人ほどであった。そして、そこから時を下って B.C.5000 年頃、いわゆる選択的な定住が行われていた時代の人口も、500 万人ほどと推定される人口が存在しという。しかし、その後の 5000 年の間に、人口は 1 億人にまで増加した。この選択的定住から B.C.1 世紀あたりまでの間に、一体なにが起ったのか。ここで押さえておくべきは、おおよそ B.C.5000～4000 年頃までに、世界的にみて、大型哺乳類の多くが人類によって狩り尽されてしまったこと、また、今日の研究で明らかのように、B.C.3500 年頃に気候変動を通じて海水レベルが急激に下がり、ユーフラテス川の水量が減少したことである。これは、中華文明が栄えた黄河においても当てはまる。乾燥化が進み、河川が主流へと縮小したことで耕作可能地も減少し、こうした過程で、人類の極端な一局集中が生じたとみられている。

人類の戦争が急増したのも、この B.C.4000 年頃からであるが、当初は、稀少な水源の奪い合いが主な争いであった。敗北した側の集団は殺されることも多かったが、次第に、勝った側の集団は、負けた側の集団を使役して、強制的に労働させる方向へと切り替えていった。農業は、狩猟採集に比べて遙かに時間を要する。また、乾燥地が広がっていた当時、そこに水を引っ張ってきて灌漑を行うには、多くの人員を必要とした。初期国家の成立とは、すなわち、争いに勝利した側の集団が、敗北した集団を奴隷として使役し、乾燥地で灌漑農業を始めさせたことを指している。勝利した集団が、王や役人とされ、奴隷の側の生産物を税として納めさせたのだ。スコットによれば、人類が定住を始め、農耕を開始し、人口が増えて国をつくっていったという定説は、今日覆されつつある。

国家の成立は、すなわち、強制的な人員（マンパワー）の集中によって初めて可能となったのだが、ここにおいて、従来の遊動的な集団が構成していた人数である 150 人のダンバー数を大幅に上回る集団が成立することになった。したがって初期国家は、従来の集団とは異なる組織体系でもって集団を維持する必要があった。

代表的なシステムとしては徴税があげられる。初期国家は、徴税というシステムを敗北した集団側に課し、食料を税として納めることを余儀なくさせた。今日、税制度は当たり前のように受け入れられているが、歴史的にみれば、B.C.4000 年以前の人類は、贈与や互酬、あるいは分配によって社会を構築してきたのであり、税というシステムは存在していなかった。徴税と再分配という制度は、人為的に構築された新しいシステムで、自然発生的に生じたものではなかったのである。当時、奴隷とされた身分は、労働に耐えられなくなり、しばしば脱走することもあり得た。そこで国家は、大規模な城壁を築くことになる。メソポタミアや中華の初期国家に見られる城壁や砦は、表面的には、外敵の侵入を塞ぐためという目的があるとされるが、他方で、奴隷の脱走を防止し、人員を恒常的に一箇

---

<sup>57</sup> スコット『反穀物の人類史』 pp.44-54

所に集中させる機能を果たしたとも考えられる。つまり、人類が一箇所に定住して、農耕・牧畜を開始したとされる定住革命には、実はこのような暴力的側面がつきまっていたのである。

国家を説明する上で欠かせないのは、徴税官と呼ばれる役人である。古代シュメールの格言には以下のような文言がある。「王がいてもかまわない。領主がいてもかまわない。けれども怖いのは徴税官だ<sup>58</sup>」と。徴税官は定期的に定住民の農耕地を訪れ、彼らの生産物の一部、時には大部分を取奪していった。彼ら徴税官は、税として納められた農作物の記録を行っており、その記録媒体として文字を用いた。最古の文字とされる楔形文字の起源は、この徴税と深い関係がある。

最初期の貨幣が登場したのもこの時代である。シュメールやバビロニアにおいては、徴税した作物の量を測る単位が必要とされた。とりわけ穀物類に関しては、升の大きさを基準に、その升が何杯分かといった形でその量が測られた。こうした、量の基準をなす単位が原始的な貨幣の出発点である（計算貨幣の登場）。紀元前 3300 年頃のメソポタミアの粘土板において、最も多く書かれている項目は、税として取り立てたオオムギの量、そして、戦争捕虜と男女の奴隷の数である。計算貨幣の登場と文字記録の登場は、軌を一にしていたのである。実は、秦の始皇帝の時の、度量衡の統一などもこの延長線上で考えられる。

初期国家は、自分たちが管理している人口を定期的に把握しておく必要があった。初期の戸籍制度もこの頃に登場している。国家が登場したこの当時、戦争が絶えなかったこともあり、戦う男性のほうが女性よりも地位が高いものとされていたため、戸籍上は、男性の名前が優先的に刻まれた。他方で、彼の妻や子供は、彼の所有物として記録される。例えば、家族を表わす英語表現 family の語源は、ラテン語の *famulus* に遡るが、これは、元来奴隷を表わし、場合によっては、家畜なども含んだ。つまり、家長である男性の所有物が家族であるという発想がこの時代がここで埋め込まれた。また、今日、世界の多くの地域では、主食として三大穀物のうちのどれかを食べているとされる。すなわち、米、小麦、トウモロコシである。しかし、なぜこれほどまでに穀物の生産量が多いのだろうか？ 実はこれも国家と深い関係がある事がわかってきた。そもそも、湿地帯が広がっていたころの時代、つまり、選択的定住時代を説明した際、彼らの主食は穀物ではなかったことにも触れた。彼らが栽培していたものも、中東であればレンズマメやヒヨコマメ、エンドウマメなど、中国でも、タロイモや大豆が作物としては主流であった。地域によっては、ヤマイモやキャッサバ、ジャガイモ、バナナやピーナッツでも良かったかもしれない。こうした栽培品種は、土地一単位当たりで得られるカロリーが小麦やオオムギよりも多く、労働力も少なくてすむ。それなのになぜ、穀物なのか？

---

<sup>58</sup> 同上 p.130



実は、穀物がこれほどまで世界中で栽培されているのは、国家が、穀物を徴税の主な対象としたことにある。穀物が徴税に適していた理由は、それが収奪するのに容易だったからだ。穀物が地上で育ち、ほぼ同時に熟すということは、軍隊や徴税役人が正しい時期に到着しさえすれば、一回の遠征で実りの全てを刈り取り、脱穀し、応酬することができるということである。そうでなくとも、作物は農民が自分たちで脱穀し、貯蔵するので、穀物倉の中身を押収すれば良かった。例えばジャガイモやキャッサバのようなイモ類の場合、作物が一年後に熟したとしても、それを一、二年地中に残しておくことは可能である。軍隊や徴税官がイモを欲しいといっても、農民はそれを地中から一つずつ掘り出す必要がある。穀物の場合、単位重量、体積当たりの価値がほとんどの食料よりも高く、保存もきいた。また、升などでその量を測りやすいのも便利であり、国家は、この穀物を、課税単位に定めた。そのため、強制的な定住を強いられた農耕民は、必ず穀物を栽培しなくてはならないことになった。

定住革命と同時に、人間と動物との関係も大きく変化していった。動物は飼いならされる家畜という存在と見なされるようになり、人間よりも低次の存在と見なされる傾向が強まった。また、定住民に対して、狩猟採集民や遊牧民の存在も劣位なものとして扱われるようになっていった。例えば、古代シュメールの神話として有名な『ギルガメシュ叙事詩』には、主人公ギルガメシュの友人として、エンキドゥという人物が出てくる。彼は、羊を飼い、作物を世話する存在として初期の『ギルガメシュ叙事詩』に登場するものの、それから 1000 年たったバージョンでは、彼は、人間以下で、飼い慣らすことのできない野獣のような存在として描かれる<sup>59</sup>。このように、農業国家、あるいは定住民の側が文明であるという意識が、B.C.2000 年頃には洋の東西を問わず成立してきた。これが中華思想における「華夷の別」という考え方に繋がっている。

まとめると、定住革命と国家の登場によって生じた変化として、①定住は強制的に行われ、移動は大幅に制限され、②集団の規模が大型化し（150 人を超える）、③課税制度が整備され、④記録用の書き文字が発達した。また、⑤戸籍制度、所有制度が発達し、⑥女性の地位が低くなり、⑦穀物が人類の主食として確立した。⑧人間と動物、の境界が作られ動物の地位の低下が生じ、また定住民と狩猟採集民、遊牧民との間に境界がつけられたのだ。

このような歴史観を見ていくと、気候変動による環境資源の枯渇を契機として争いが助長され、集団間の争いにより、勝った方の集団が他方の集団を労働力として行使する形で支配し、強制的に人を集約させるような形で国家は誕生したことがわかる。人口爆発もそこから生じている。また、穀物も国家の税金のために要請され、ここに、単一作物の集中的な栽培が生み出されたのだ。また、国家による人口管理のために戸籍が作られ、女性は男性の支配下におかれた。また、女性は人口増加の手段として妊娠出産を繰り返したため、その人口増加に見合

---

<sup>59</sup> 同上 p.58

うだけの、動物の家畜化が進み、人間による動物の支配が強まった。そしてそこから外れた弓道的な生き方は、常識外れの野蛮なものとして認識されるようになったのである。

人類史的にみれば、国家の誕生が様々な支配・被支配構造を生み出し、さらには、戸籍という形で国家に帰属しなければ生きていけない状況を作ることによって、そこから外れたものを差別対象として扱うようになった事がわかる。そして、国家構造は人口増加を加速化させ、国家の発展のために経済規模を拡大することにより、更なる気候変動を迎えているのである。そして今まさに、国家間の緊張は高まり、争いが起きかねない状況を迎えている。

地球資源の枯渇を契機として誕生した国家は、人口と経済の加速的増加をもたらし、今日、新たな地球資源の枯渇を招いている。今日まさに起きようとしているのは、現代の地球資源の枯渇を契機とした人工知能、情報社会の誕生であるのだ。これは国家誕生の場合と非常に類似した構造を持っている事がわかる。もし仮に、この構造がさらに加速化し、情報社会に帰属していなければ生きていけなくなり、そこから外れたものは差別の対象となるような社会が加速していくと考えると、さらなる支配構造が構築されるリスクが高い事が、歴史の流れからも確認できる。

話を戻すが、定住革命と国家の誕生の歴史は、今日問題となっている、労働問題、男女格差、単一作物の栽培による多様性の崩壊、動物の人間による抑圧と家畜倫理、現在の家制度の問題と分かち難く結びついている事がわかる。

支配・被支配構造の背景には、このように、人を含めた多様な生きものの個別性を認識することなく、人間の認識の限界（ダンバー数）を超えた規模の組織(国家)を作ること、その制度化されたシステムの中に、人を含めた多様な生きものを強制的に従属させたという歴史がある。勝者と敗者との間の大局的な支配構造から派生する形で、男性による女性の支配、人による自然界の支配といった、支配構造の連鎖が構築された。

よって、端的に解決策を述べるとしたら、国家体制をやめ、150人規模のコミュニティーを多数形成し、それぞれの多様性を生かした組織を再構築することではないだろうか。そして、その組織の内部において、多様な植物が共生し、互いに生態系を生かしていけるような農法、例えば、協生農法などの方法を取り入れながら生活し、自然との関わりの中で、豊かな文化、芸術、知恵、精神を磨き、多様な書物をもと、過去の人類が創り上げた創造や失敗を学ぶことではないだろうか。さらに、一つのコミュニティーでは最低数ヶ月いられるような期間を設けることで、そのコミュニティーに貢献できるようにしつつも、移動したければ別のコミュニティーへの移動が自由であり、組織構造を維持しながらも、その構造を外部に向けて常に開かれていくこと、変容可能で創発的なネットワークを、巨大な国家を作るためではなく、互いの文化や知恵あるいはノウハウを豊かにしていくために用いていくこと。このようなあり方が無理のない組織形成に思える。もちろんこれは一つの案であり、他にも複数のアイデアが考えられるはずだが、重要なのは、このような議論を、より開かれた形で行っていく事であるように思える。具体的な組織構造やその運営方法に関しては引き続き検討していきたい。

### 3-1-2 パトリアルキー（家父長制）による問題

前節では、大局的に支配被支配構造を分析し、国家という構造が支配被支配構造を加速的に作り上げてきたことを述べた。本節では、支配被支配構造を家父長性(パトリアルキー)という観点から捉えていきたい。先ほど、定住革命と国家の誕生について述べたが、実は国家の誕生によってコミュニティーのあり方が母系制から家父長制へと変化した事が最近の研究の結果、わかってきた。国家は先ほども述べた通り、父を中心とした戸籍管理を進めたのである。よって、家族やコミュニティー単位での生き方、あるいは人間の深層心理にこの家父長制というあり方は深く影響を与えていると考えられる。それでは家父長制とは一体どのようなものであろうか？

『日本大百科全書』によると、家父長制とは、「西欧の古代や中世の家共同体において家長が家父長としての権力を行使し、成員を統率支配する制度。その家の成員は、この家父長に対し厳密に個人的な恭順関係において服従する。この家父長がもつ権力は無制限かつ恣意的で、しきたりとなっている伝統的規範が侵しがたいものだという信念に基づく個人的な服従によって正当性を与えられている。それゆえ、他の伝統によって制限されたり、または競合する他の権力によって妨げられたりしない限りは、まったく自由気ままに行使される。古代ローマの家父長制家族はその典型であり、家父長の権力は、家の成員が男であれ女であれ、子であれ奴隷であれ、財産同様に取り扱い、生殺与奪の権さえもっていた。子は自由人として奴隷とは区別されたが、家父長権は自分の子を奴隷として売ることも、遺言に基づいて奴隷を子とし同時に相続人とすることさえもできた。家父長権は、このように家に属するものに対するいっさいの支配権を集中した単一のものであったが、のち、子孫に対する家父権、妻に対する夫権、奴隷に対する奴隷権、物に対する所有権などに分化した。家父長制家族は近代家族と対比され、日本の家における家長もこれに準ずるようみる説がある。また家父長制の概念は、その分権化された家権力による家産制支配などと同様に、社会の支配構造の型としても用いられる」とある。

よって家父長制に基づくあり方では、徹底的な父による支配が行われてきた事がわかる。近代家族の形態をとるようになって、家父長的支配関係から、愛情を中心とした夫婦、親子関係に変化したと形式的には考えられているものの、人の心理の深層構造に家父長制は深く影響を与えている。

それでは現代において家父長制はどのように捉えられているのだろうか。家父長制の興味深い理解をミキ・カシュタンの取り組みを参照しながら考察していきたい。ミキ・カシュタンは、カリフォルニア大学バークレー校で社会学の博士号を取得し、非暴力コミュニケーションの実践に関する3冊の本の著者であり、NVC(Nonviolent Communication=非暴力コミュニケーション)の実践について国際的に講演している研究者兼非暴力コミュニケーションの実践家でもある。まずは、ミキによる家父長制の定義から見ていこう。

家父長制とは、世界観、この地球上で人間としてお互いにどう生きるかという取り決め、どのような制度を作るかという暗黙の青写真、そして制度そのものに備えるために若者に何をすべきか、という指針を包含する制度である。家父長制の根本原理は分離と支配である。分離とは、自己、他者、生命、そして自然からの分離である。この数千年の間に私たちが作り上げてきた基本的な構造は、支配と服従に基づいており、私たちが受け継いできた世界観は、私たちの基本的な性質と、私たちとは別のものと見なされる「自然」の両方を克服するために必要なものとして、それらを正当化している。私たちは自制心を誇り、「感情」を嫌うのだ。私たちは組織的に、命令と支配の形で活動し、自然を搾取し、利用し、服従させ、そして近代では販売のための商品に変換するものとして扱ってきた<sup>60</sup>。

では、なぜ他の言葉ではなく家父長制なのか？それは、少なくともヨーロッパの歴史的系譜においては、後に植民地との接触を通じて他の多くの文化に影響を与えたが、分離と支配への移行は、父性を中心に据えることと一致していたからである。ホモ・サピエンスの存在の97%がそうではなかったのに、なぜ父性を中心になったのか、簡単にまとめると、女性を支配することによってのみ、父親が誰であるかを確実に知ることができるからである。生物学的な父親と子供の間には不可解な距離があり、それは女性を監禁し、他の男性が彼女にアクセスできないようにすることによってのみ完全に排除することができるのだ。だからこそ、家父長制の社会は必然的に支配と分離の社会となるのである。私たちはこの状態に慣れきってしまっており、ほとんどの人はそれが、自分たちが作り出したものであることに気づかないのだ<sup>61</sup>。

少年たちが支配する立場になるための準備として、少女にはない方法で残酷な扱いを受けていることを知った。少年が、「男らしさ」という言葉の中にすでに組み込まれている仮面をかぶることを学ぶことは、少年が学ぶ家父長的な男らしさの最初のレッスンだ。彼は、性差別主義が男性と定義する受け入れ可能な行動に適合しなければ、自分の核心的な感情を表現できないことを学ぶ。家父長的な理想を実現するために真の自己を放棄することを求められ、少年たちは早くから、自己裏切りを学び、こうした魂の殺人行為に報いられるのである<sup>62</sup>。

そして、家父長制は一部の男性に社会的な権力を与え、ほとんどの男性には女性との関係においてわずかな権力しか与えず、すべての男性から人間性の中核部分を奪っているのだ。これは非常に大きな問題である。これこそが、少年や男性の肉体的、感情的、精神的な残虐行為という、暴力の根源だと考える。人間は、自分の自然な寛大さ、優しさ、気遣

---

<sup>60</sup> Miki & Arina Kashtan 「Why Patriarchy is not about men」

<sup>61</sup> 同上

<sup>62</sup> 同上

い、思いやりを失うほどの残忍さを最初に受けなければ、他の人間に害を与えるようなことは決してしないと考えているからである<sup>63</sup>。

女性についてはどうでしょうか？女性の状況も複雑であることがわかる。なぜなら、ほとんどの場合、子供を除いて、女性は他人に対して支配的になるように明確に訓練されておらず、自由と権力を奪われ、また、男性から嫌われ悪意を持って嘲笑されるような人間の中核的な特性の多くを保持することが「許されて」いるからである<sup>64</sup>。

また、あらゆる抑圧システムは、支配と服従の関係の原型である家父長制の上に成り立っていると考えられる。家父長制は、現在、地球上のほとんどすべての生きている人間に影響を与えており、もはや私たちの手で苦しむことすらできない無数の他の種にも影響を与えている。家父長制社会は、農業が可能にした乾物の貯蔵能力を利用して、近代では前例のない規模に達している蓄積と蓄財のプロセスを始めた。また、化石燃料を使うようになってからは、急速に制御不能に陥り、危険な状態になっている。現在、地球上で支配的な蓄積、貪欲、競争、搾取のシステムである資本主義は、その生みの親である私たちをも破壊している<sup>65</sup>。

これまで考え、行動し、訓練されてきたすべてのものと、自分自身を同一視しないことから始めてください。あなたが与えられてきたすべてのものを吟味し、何が本当に人生のニーズに合っているのかを見極めることができるようになります。人との付き合い方、モチベーションの上げ方、お金との付き合い方、仕事への取り組み方、政治との関係をどう考えるか、ジェンダーに関するトレーニング内容、自分とは異なる人への対応、子供がいる場合は子供への話し方など、すべてのことを意味しています。また、これまで女性と結びつけられてきた人間としての側面（気遣い、弱さ、人間関係への配慮など）を、今一度、新しい方法で祝福し、肯定することで、私たち全員に充実感を取り戻すことができます。本当にすべてです<sup>66</sup>。

以上、ミキが述べるように家父長制とは、世界観であり、自己、他者、生命、そして自然からの分離である。そして家父長制は人や自然を支配し服従させることによって成り立っている。そして先ほども述べた通り、国家の誕生と結びついた父権制のあり方と結びつき、女性や自然を支配していく構図をとってきたのである。そして、男らしさという家父長制に基づく男性観を植え付けられ、自己との分離をきたし、そしてさらに一部の男性にのみ社会的権利を与えることで、男性間でも支配被支配構造を招き男性に対して二重の抑圧が働くため、抑圧は暴力の根源となり、新たな暴力と抑圧構造を生み出してしまふ。

---

<sup>63</sup> 同上

<sup>64</sup> 同上

<sup>65</sup> 同上

<sup>66</sup> 同上

また女性の場合は、他者に対して支配的になるように訓練はされていないが、女性らしさという女性観のもと、自由と権利を奪われ、男性に対して逆らえないような構図をとっていく。そして人間の中核的な特性すなわち、自己との繋がりを保持しているが、それらは男性から理解されず批判され嫌悪感を抱かれ、場合によっては男性からの暴力に繋がりを、その結果さらに自己表現の機会を喪失し、更なる自由と権利の剥奪を招く。このように、女性の方も二重の被支配構造を受けているのである。これらは自己、他者、生命、そして自然からの分離に基づいており、自然破壊、加速的な資本主義、性差別、人種差別の根っこにある根幹の問題である。

またミキは、別の論文で家父長制に関して以下のようなことを述べている。

家父長制と教育機関による規範的な家父長制の教育は、私たちの欲求や私たちが望むものへの攻撃をもたらすと述べる。家父長的な教育は近代的な出産に始まり、母と子の両方に影響を与えるような、持続的な強制や辱め、ニーズが満たされないという慢性的な経験から生じるトラウマを繰り返し体験することで、信頼を損ない2つの結果をもたらす。一つは、入ってきた信号を危険と解釈し、闘争・逃走・凍結のシステムを作動させる傾向が強くなるということだ。本来、稀にしかない本当の危険な状況に直面するために進化したこのメカニズムは、相手を敵のように思わせる。これにより、私たちは他人から切り離され、自分のことだけ考えるようになるのだ。このように少なくともヨーロッパでは、自然への信頼を失い、また侵略により人間への信頼を失い、このトラウマから回復する時間はなく、家父長制は数千年の間に人類社会への支配力を強め地球上のより多くの場所、より多くの意識に浸透し、現在では闘争/逃走/凍結システムが半永久的に作動しているのだ。そして第二の結果は、家父長制の教育の一環として、恥をかかせることや、子供の基本的なニーズである愛と所属を執拗に否定する事が日常的に行われ、圧倒的に多くの人が自分は根本的に間違っていると信じ、集団に受け入れられるように、望まない部分を隠したり、望まない行動をやめたりするようになる。家父長制は、強制と羞恥の両方を通じて、2つの重要なニーズを分離し、対立する事で成長を妨げる。一つは信頼、所属、見られたいといったニーズを含む安全のクラスターで、もう一つは自己表現、真実、存在感といったニーズを含む自由のクラスターだ。これはつまり、子供の頃は安全の三角形は与えられたものではなく、「良い子」になる事で獲得しなければならず、大人の考えや指示に全面的に従う必要が出てくる。つまり、安心感や帰属意識の代償として、自分自身を完全に表現する自由が失われるのだ。そして、私たちの教育はわずかにある優位な立場をめぐって他者と競争したり、争ったり、あるいは他者の優位性に服従したりするように仕向けているのだ。それは愛を欠落させ、自己表現を条件付きにし、恥をかかせ、強制的な選択をさせたりする事で、私たちを内部で分裂させ、自分の秘密の「間違い」が露呈するのではないかという恐怖に悩まされるので

ある。そして家父長制の世界では支配を維持するために、性別や年齢、階級や人種など、人々の間の外的な分断を必要とするのである<sup>67</sup>。

家父長制的な教育の影響を逆転させることは、全体性を取り戻し、2つの必要な三角形の橋渡しをするという途方もないことを引き受けることになる。(図6)の取り戻すプロセスの中で、自由に自分自身をより多く見せることを選択するので、所属と安全性を再び失うリスクを負うことになる。安全性と帰属性を放棄した場合、それを取り戻すプロセスは脆弱性を選択することを意味し、自分の脆弱性を他人から切り離したり隠したりして自分を守る代わりに、十分に見てもらえない、愛されないという潜在的な失望感に再び心を開くプロセスを必要とする。それは自分の弱さを他人から切り離したり、隠したりして自分を守るのではなく、十分に見てもらえなかったり、愛されなかったりしたときの潜在的な失望感を再び受け入れることを意味する。このようなプロセスの中で統合を進めていくと、私たちの存在は他人に見られることに依存せず、私たちの真実はもはや所属することと矛盾せず、私たちは自分の真正性を完全に表現しながらも信頼を経験し、自由と安全を同時に経験する事ができる。家父長制の世界における個人としては、これは天国に限りなく近いものかもしれない。一方で、癒しと統合の作業は生涯続くものであり、私たちは、既存のパラダイムに組み込まれたままなので、どちらか一方だけの思考、非難、恥、裁かれることへの恐怖、人生や人を理解するための正しい/間違っただけのフレームに陥りやすいのである。よって分離と厳しさを克服し、自分と他者の選択に無限の優しさをもたらす事ができるようになるためには、継続的な選択と他社からの無限のサポートが必要である。システムレベルでケアのコミュニティの創造を支援し、親と子を大切にし、利益ではなくニーズに対応し、意思決定をコミュニティに分配し、コモンズを回復し、それに伴って寛大さとケアの流れを取り戻すような社会構造が必要となってくる<sup>68</sup>。

---

<sup>67</sup> Miki & Arina Kashtan [2019] pp.49-50

<sup>68</sup> Miki & Arina Kashtan [2019] pp.52-53

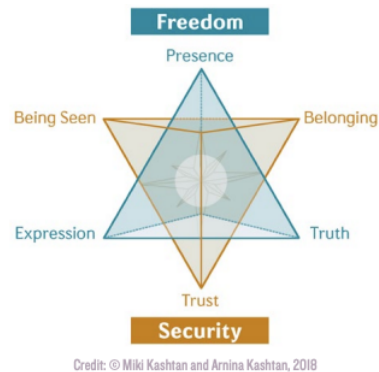


図 6<sup>69</sup>

私たちは、このようにして、家父長的な教育によって、自分自身であれ、子供であれ、世界の指導者であれ、何かが起こった時に誰が悪いのか、どうやってそれを罰するのかを常に考えるようになっているが、その代わりに人生を理解するための全く異なる枠組みを採用することができる。つまり人間が行うすべてのことは、年齢、性別、人種、階級など、人間を分断するあらゆるカテゴリーに関係なく、すべての人間に共通するニーズに応えるための試みであるという視点である。それは、恐怖—恥—避難の枠組みから、愛—脆弱性—好奇心の生き方へとシフトする事である<sup>70</sup>。

家父長制は、人間の闘争・逃走・凍結のシステムと恥のシステムを利用し、発展してきてしまったのだ。その結果、信頼、所属、見られたいといったニーズを含む安全のクラスターと、自己表現、真実、存在感といったニーズを含む自由のクラスターの間で分離をきたし、人々は、支配的な構造の中で、優位な立場をめぐる他者と競争したり、争ったり、あるいは他者の優位性に服従したりするように仕向けられ、自己表現による恥の恐怖から、自己表現の機会を喪失してしまったのである。

このような根本的支配、被支配の構図、家父長制の構造の中でも自己と自然とのつながりを取り戻し、脆弱性を受け入れながらも、一人一人のニーズに基づく生き方を実践していく事が生き方としての根本解決となる。そしてこのあり方は人間にとどまらず、人と自然の間でも生じてきた事である。事態は深刻であり、家畜動物を含む自然界の生き物は家父長制の延長として支配を受け、彼らは条件付きの信頼、所属、見られたいといったニーズを含む安全のクラスターさえも与えられないのである。ましてや自己表現、真実、存在感といったニーズも与えられない。無条件にほぼすべてのニーズを剥奪しているのである。人の間で働く家父長制による支配被支配構造は、自然界というはけ口を使って、更なる悪化を迎えている。自然界の生き物の全ニーズを奪うことによってどうにか自分たちの

<sup>69</sup> Miki & Arina Kashtan [2019] p.53

<sup>70</sup> 同上 p.54



状況を維持しているのである。なぜなら自分たちのニーズも剥奪されているのである。そして、その結果私たちが本来、密接につながり、私たちを生かしてくれている自然界との分離は更なる悪化を迎えている。そして自然界との間での信頼関係の崩壊を招き、闘争/逃走/凍結システムが働き、自然界は機能不全に陥り、そして闘争反応として新型ウイルスのような新規感染症と大規模なパンデミックや、ハリケーンや、洪水、土砂崩れを含む様々な自然災害につながっていると考える事ができる。

上記で述べてきた家父長制システムの認識すること、怖一恥一避難の枠組みから愛一脆弱性一好奇心へと変換すること、そしてニーズの尊重は、人間同士の関係にとどまることなく全生命の間での関係に広がっていくものだ。私はこのように、全生命の間で生じる愛に基づき、互いのニーズに気づき尊重する新たなシステム構築を One release(すべての生命の解放)と定義することにする。

### 3-1-3 One release(全ての生き物の解放 )

前節で、全生命の間で生じる愛に基づき、そして互いのニーズに気づき尊重する新たなシステム構築を One release(すべての生命の解放)と定義した。

One release(すべての生命の解放)を実現していくためには、家父長制による悪循環の連鎖の代わりに、愛一脆弱性一好奇心の生き方へと変革し、自己、他者、生命、そして自然界全体とのつながりを回復し、人間、動物、植物、微生物など全生命に共通するニーズに応えるための試みであるという視点が必要となってくる。そして、時にそのようなあり方で生きていこうとすると、人間社会において、所属と安全性を失う可能性がある。しかし、その時に安易に家父長制に基づく生き方に流され、自分の弱さを他人から切り離したり、隠したりして自分を守るのではなく、十分に見てもらえなかったり、愛されなかったりしたときの潜在的な失望感を再び受け入れることで、自己やより大きな自然界との統合をもたらしていく。しかし先ほども述べた通り、人の社会の中だけでも非常に難しい取り組みを全生命に広げて行っているため、自然界の声なき声に心を傾け、ニーズに気づき、そしてそのニーズを尊重するという継続的な選択と他者や自然界からの無限のサポートが必要である。システムレベルで全生命の解放のコミュニティの創造を支援し、親と子と自然界との関係性を大切にし、利益ではなくニーズに対応し、意思決定をコミュニティ(ここには自然界も含まれるだろう)に分配し、コモنز(ここにも自然界が含まれる)を回復し、それに伴って寛大さとケアの流れを取り戻すような社会構造が必要となってくる。

また、以前、ダンバー数(150人程度)を超えたコミュニティの発展と国家の誕生が、人を含めた多様な生き物の個別性を認識することを困難にし、従属的な国家システムを作り上げ、その結果男性による女性の支配、人による自然界の支配のような支配構造の連関を加速させた事に触れた。国家の支配構造は、家父長制と非常に密接に関わりながら発展してきたものだと考えられる。人類は心理面で家父長制のシステムを用い、物理的なシステムとして国

家による従属支配を構築することによって、強固な支配被支配関係を築いてきたのである。よって、「国家体制をやめ 150 人規模のコミュニティを多数形成し、それぞれの多様性を生かした組織を構築し、その組織の内部において、多様な植物が共生し生態系を生かしているような農法、例えば協生農法などの方法を取り入れながら生活し、自然との関わりの中で、豊かな文化、芸術、知恵、精神を磨き多様な書物をもとに、過去の人類が創り上げた創造も失敗も学ぶ事ができ、そして例えば一つのコミュニティでは最低数ヶ月いるような期間を設け、コミュニティに貢献をしながら、移動したければコミュニティ間の移動は自由であり、組織構造を維持しながらもその構造は常に外部に開かれており変容可能であり、そして組織間での創発的なネットワークを巨大な国家を作るためではなく、互いの文化や知恵あるいはノウハウを豊かにしていくために用いていく可能性無限大のプラットフォームのようなあり方だ。もちろんこれは一つの家であり非常に多数のアイデアが考えられうるはずで、むしろこのような議論をより開かれた形で行っていく事に意義があるように思える。具体的な組織構造やその運営方法に関しては引き続き検討していきたい」という上記のアイデアを、家父長制のシステムの変革と同時に考慮していく必要がある。物理的構造において多様なコミュニティによって成り立つ自律分散システムを取り入れ、心理的構造においてすべての生きもののニーズに開かれたあり方を実現していく必要があるだろう。

一方で、One release(すべての生き物の解放)の取り組みの実現は非常に困難な状況を迎えていることも確かである。既存の国家戦略と資本主義システムの戦略に飲み込まれ、逆利用されるリスクを多大に含んでいる。よって、各コミュニティの間で強靱なネットワークを作り、既存の国家戦略と資本主義システムさらには家父長制の構造を持続的に分析し、さらには、強靱な愛と非暴力の力を築いていかなければ、このビジョンの実現は不可能である。

## 1 2. 人類の推進力の可能性

ここで人類の力をさらに解放し推進していく必要性が生まれた。男性原理と呼ばれてきた(実際には先ほどの人類のニーズへの解放によって男性原理と女性原理の区分は無くなった)力をどのように再び生かしていくのかということに関してである。

ここで、ジョン・ミラーによる男性原理と女性原理と呼ばれる性質の両極的な対概念を見ていく。

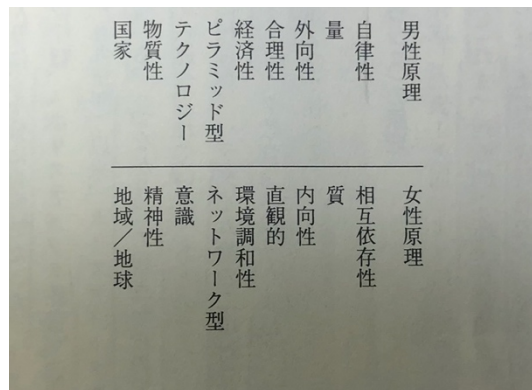


図 7<sup>71</sup>

私にはどうもここで示されている男性原理(男女の区別は暫定的にしている)は家父長制の延長線上に置かれた男性原理を記述しているように思えてしまう。特に、懐疑的に思えるのが、ピラミッド型、国家の部分だ。男性の外向的な力とはピラミッド型のシステム、家父長制を促進する国家システムを担っているのだろうか？本当に人間の男性原理の本来性はこのような性質なのだろうか？男性原理による外向的な力、合理的な力、自律的な力、多くの量をカバーする力というのは、本当にピラミッド型の支配被支配に基づく家父長制を加速するような力なのだろうか？

むしろ本来の生に解放された男性性(何度も言うが男女の区別は暫定的にしている)というのは、様々な可能性に開かれ、宇宙における様々な生命との共進化を推進していく力ではないか？それは、自身の ego を貫き、他者に自然界にそして宇宙全体に貫いていくような突破力ではないだろうか？非暴力、不服従のニーズをあらゆる暴力性に屈せずどこまでも貫いていくような潔さではないだろうか？もちろんこれが男性性であると言うのは、新たな男性像を作り上げることにつながり、支配被支配の構図を再生産してしまうだろう。だがしかし、一般的に男性的だとされていたものの根幹的な性質を改めて懐疑的に見直していくことは非常に重要な局面を迎えている。そしてこれは先ほどから何度も補足しているように男性に限らず、すべての生命に関わってくる問いかけなのである。今後は古典的な男女原理に囚われず、個々人が自分のあるいは他者や自然界のニーズに気づき、応答することで自己、他者、すべての生命とつながり、関わり合い、そして外に向かう外向的な力と推進力をあらゆる支配と暴力性に決して屈せず宇宙全体を貫く力として用いていく必要があるように思える。そしてこれは、今後の問いとして引き続き検討していきたい。

## 4章 結論

<sup>71</sup> 吉田 [1999] p.196

さて論文全体を通じて、感染症の背後にある文明と自然環境が密接に絡み合った諸問題をそれぞれ丁寧に扱っていき、近年議論されている動物福祉と動物倫理の議論を踏まえつつ、その諸問題を解決する際に単なる倫理的規範から解決しようとする限界性を述べた。そして、「喜びが抑圧を超える」という構図を見てきた。また「そもそもなぜ人間と自然との間であるいは人間の間で支配被支配構造が出来上がったのか」という問いに対して、ダンバー数(150人程度)を超えたコミュニティの発展と国家の誕生が、人を含めた多様な生き物の個別性を認識することを困難にし、従属的な国家システムを作り上げ、その結果男性による女性の支配、人による自然界の支配のような支配構造の連関を加速化させたこと、ミキ・カシュタンが述べる家父長制(パトリアルキー)の構造(その根本原理は分離と支配であり、分離とは、自己、他者、生命、そして自然からの分離である。この数千年の間に私たちが作り上げてきた基本的な構造は、支配と服従に基づいている)が、相互に循環しながら国家の支配被支配関係を人間の間で、さらには自然の間で拡大させてきたことを確認した。

そして、この解決策として、One releases(すべての生命の解放)を提唱し、国家体制をやめ150人規模のコミュニティを多数形成し、それぞれの多様性を生かした組織を構築し、その組織の内部において、多様な植物が共生し生態系を生かしていけるような農法、例えば協生農法などの方法を取り入れながら生活し、自然との関わりの中で、豊かな文化、芸術、知恵、精神を磨き多様な書物をもとに、過去の人類が創り上げた創造も失敗も学ぶ事ができ、そして、例えば一つのコミュニティでは最低数ヶ月いるような期間を設け、コミュニティに貢献をしながら、移動したければコミュニティ間の移動は自由であり、組織構造を維持しながらもその構造は常に外部に開かれており変容可能であり、そして組織間での創発的なネットワークを巨大な国家を作るためではなく、互いの文化や知恵あるいはノウハウを豊かにしていくために用いていく可能性無限大のプラットフォームのようなあり方を提示した。また、ミキ・カシュタンの家父長制の変革システムを生命全体まで広げ、家父長制による悪循環の連鎖の代わりに、愛—脆弱性—好奇心の生き方への変革し、自己、他者、生命、そして自然界全体とのつながりを回復し、人間、動物、植物、微生物など全生命に共通するニーズに応えるための試みであるという視点双方を取り入れることにより、根本的な支配被支配構造に対して非暴力の推進を目指した。

さらに、一般的に男性性だと言われているあり方に対して疑問を投げかけ、本来の生に解放された男性性(男女の区別は暫定的にしている)というのは、様々な可能性に開かれ、宇宙における様々な生命との共進化を推進していく力ではないか、それは、自身のegoを貫き、他者に自然界にそして宇宙全体に貫いていくような突破力ではないだろうか、非暴力、不服従のニーズをあらゆる暴力性に屈せずどこまでも貫いていくような潔さではないか、そしてこれは人類皆に開かれた問いではないか、という問題提起をしつつ本論文を終えさせていただいた。

さて、このように今日の地球環境問題の背後にある自然破壊、そしてその背後にある支配被支配の連関構造による悪循環的な状況の悪化を One release(すべての生命の解放)によって捉えなおし、単なる表面的に自然保護を促進するだけでなく、根本的な問題解決の試みをしてきた。

今後の課題として、今回は非常に仮説となる議論も多かったので、今後、具体的社会の中でこの論文で述べた事がどのように生かされ実践されていくのか具体的な検証をしていく必要がある。また今回述べた内容は非常に挑戦的な内容でもあるので、更なる根拠と具体的レベルでの方法論の提示に励んでいきたい。

## 参考文献

- ・吉田敦彦『ホリスティック教育論 日本の動向と思想の地平』,日本評論社,1999年
- ・三羽邦久「慢性疲労症候群(筋痛性脳脊髄炎)と循環器異常」『非専門医にもできる！リウマチ・膠原病診断(Vol.119 No.2)2017年2月号』,南江堂,2017年
- ・日本ワシヘルスサイエンス学会「学会趣意書」  
<http://jsohsci.kenkyuukai.jp/special/?id=22218>
- ・Centers for Disease Control and prevention「One health basics」  
<https://www.cdc.gov/onehealth/basics/index.html>
- ・福岡県「ワシヘルス“One Health～人と動物の健康はひとつ。そして、それは地球の願い～」  
<https://www.pref.fukuoka.lg.jp/contents/one-health-fukuoka.html>
- ・World Bank「One-Health-Framework-2018」,World Bank,2018年  
<https://documents1.worldbank.org/curated/en/703711517234402168/pdf/123023-REVISED-PUBLIC-World-Bank-One-Health-Framework-2018.pdf>
- ・ユヴァル・ノア・ハラリ『ホモデウス テクノロジーとサピエンスの未来上』,河出書房新社,2018年
- ・浅野幸治『ベジタリアン哲学者の動物倫理入門』,ナカニシヤ出版,2021年
- ・枝廣淳子『アニマルウェルフェアとは何か 倫理的消費と食の安全』,岩波書店,2018年
- ・桐村里紗『腸と森の「土」を育てる 微生物が健康にする人と環境』,光文社,2021年
- ・鷲谷いづみ『実践で学ぶ〈生物多様性〉』,岩波書店,2020年
- ・鷲谷いづみ『<生物多様性>入門』,岩波書店,2010年
- ・環境省「地球温暖化の感染症に係る影響に関する懇親会、地球温暖化と感染症、いま何が分かっているのか？」  
[https://www.env.go.jp/earth/ondanka/pamph\\_infection/full.pdf](https://www.env.go.jp/earth/ondanka/pamph_infection/full.pdf)
- ・山本太郎『感染症と文明—共生への道』,岩波書店,2011年
- ・ジャレド・ダイヤモンド『銃・病原菌・鉄、上』,草思社,2012年

- ・ 広井良典『無と意識の人類史 私たちはどこへ向かうのか』,東洋経済新報社,2021年
- ・ 一般社団法人 アニマルウェルフェア畜産協会

<http://animalwelfare.jp/>

- ・ World animal protection 「animal protection index」

<https://api.worldanimalprotection.org/>

- ・ ジェームズ・C・スコット『反穀物の人類史 国家誕生のディープヒストリー』,立木勝  
訳,みすず書房,2020年

- ・ 高田礼人『ウイルスは悪者か お侍先生のウイルス学講義』,亜紀書房,2018,p89-90

- ・ Miki & Arina Kashtan 「Why Patriarchy is not about men」

<https://thefearlessheart.org/why-patriarchy-is-not-about-men/>

- ・ Miki & Arina Kashtan 「Parenting without Obedience A preliminary Guide to  
Intergenerational Collaboration」

<https://thefearlessheart.org/wp-content/uploads/2020/01/Kashtan-TIKKUN-Winter-2019.pdf>